



本^あ牧^り十二^{てん}天^{てん}宮^{みや} 今^{いま}牧^りの^と塙^{はら}はありと真^{まこと}言^{こと}宗^{そう}多^た聞^{もん}院^{いん}別^{べつ}當^{たう}奉^{ほう}祀^し

と祭^{さい}神^{しん}ハ十二^{てん}天^{てん}神^{しん}躰^{たい}ハ海^{うみ}上^{かみ}出^い現^{げん}と云^い尤^{なほ}佳^よ景^{けい}の地^ちなり神^{かみ}

奈^な川^{がは}の臺^{たい}より眺^{なが}望^{ぼう}もる所の絶^{たつ}壁^{へき}ハもかり此^{この}社^{やしろ}の右^{みぎ}に

裏^{うら}手^て小^こ聳^{そび}立^たちし所の巨^こ巖^{がん} こまなりと巖^{がん}頭^{とう}教^{きやう}株^{かぶ}の松^{まつ}梅^{ばい}

鬱^{うつ}蒼^{そう}と々々栄^{えい}茂^{もう}せし 本^{ほん}牧^りの地^ちハ川^{がは}田^{でん}原^{げん}北^{きた}糸^{いと}家^けの分^{ぶん}限^{げん}帳^{ちやう}ハ左^{ひだり}傳^{でん}門^{もん}大^{だい}夫^{ふう}領^{りやう}も由^{よし}んえん此^{この}地^ちゆ^ゆ百^{ひやく}世^{せい}父^ふ同^{どう}橋^{はし}本^{ほん}

吾^{われ}妻^{つま}明^{あきら}神^{かみ}社^{やしろ}同^{どう}所^{しよ}六^む町^{ちやう}斗^と南^{なん}の方^{かた}原^{はら}宿^{しゆく}といふあり相^{あひ}傳^{でん}ふ

天^{てん}和^わ年^{ねん}間^{かん}此^{この}地^ちの獵^{りやう}人^{にん}吉^{きち}太^た夫^{ふう}といふもの此^{この}海^{うみ}上^{かみ}は網^{あみ}を投^な

し々當^{あた}社^{やしろ}の神^{かみ}躰^{たい}と得^えし 本^{ほん}像^{ざう}ハ髪^{かみ}髻^{むす}く雛^{ひな}の依^よる小^こ祠^{ひら}を

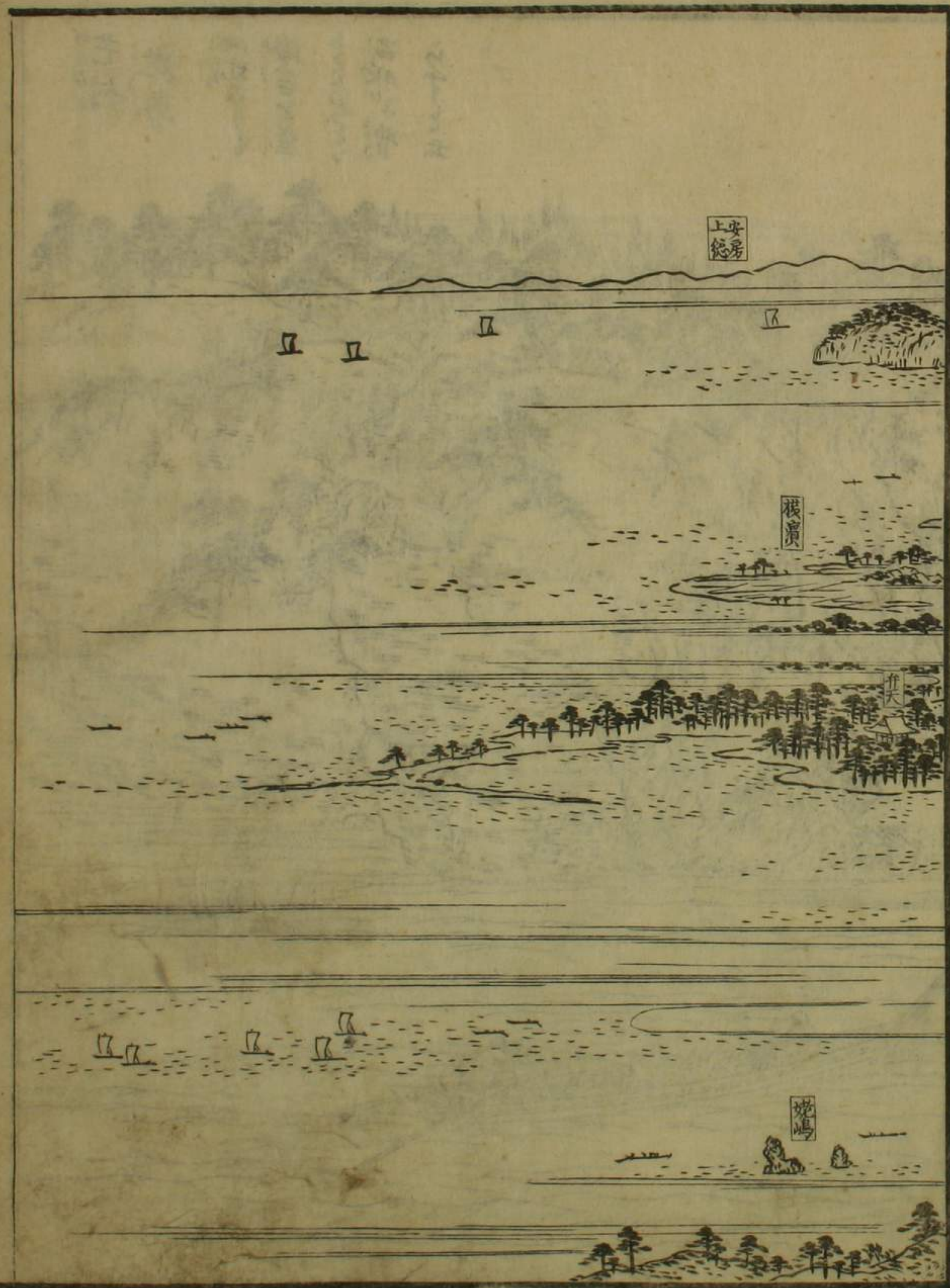
宮^{みや}建^たちし云^い此^{この}神^{かみ}躰^{たい}ハもや南^{なん}總^{そう}本^{ほん}更^{さら}津^つ吾^{われ}妻^{つま}明^{あきら}神^{かみ}の神^{かみ}

像^{ざう}ゆ々浪^{なみ}は漂^{ひら}ひ此^{この}地^ちは止^とまらぬといふ祭^{さい}神^{しん}ハ八^{はち}皇^{みかど}十一^{じゅういち}代^{だい}

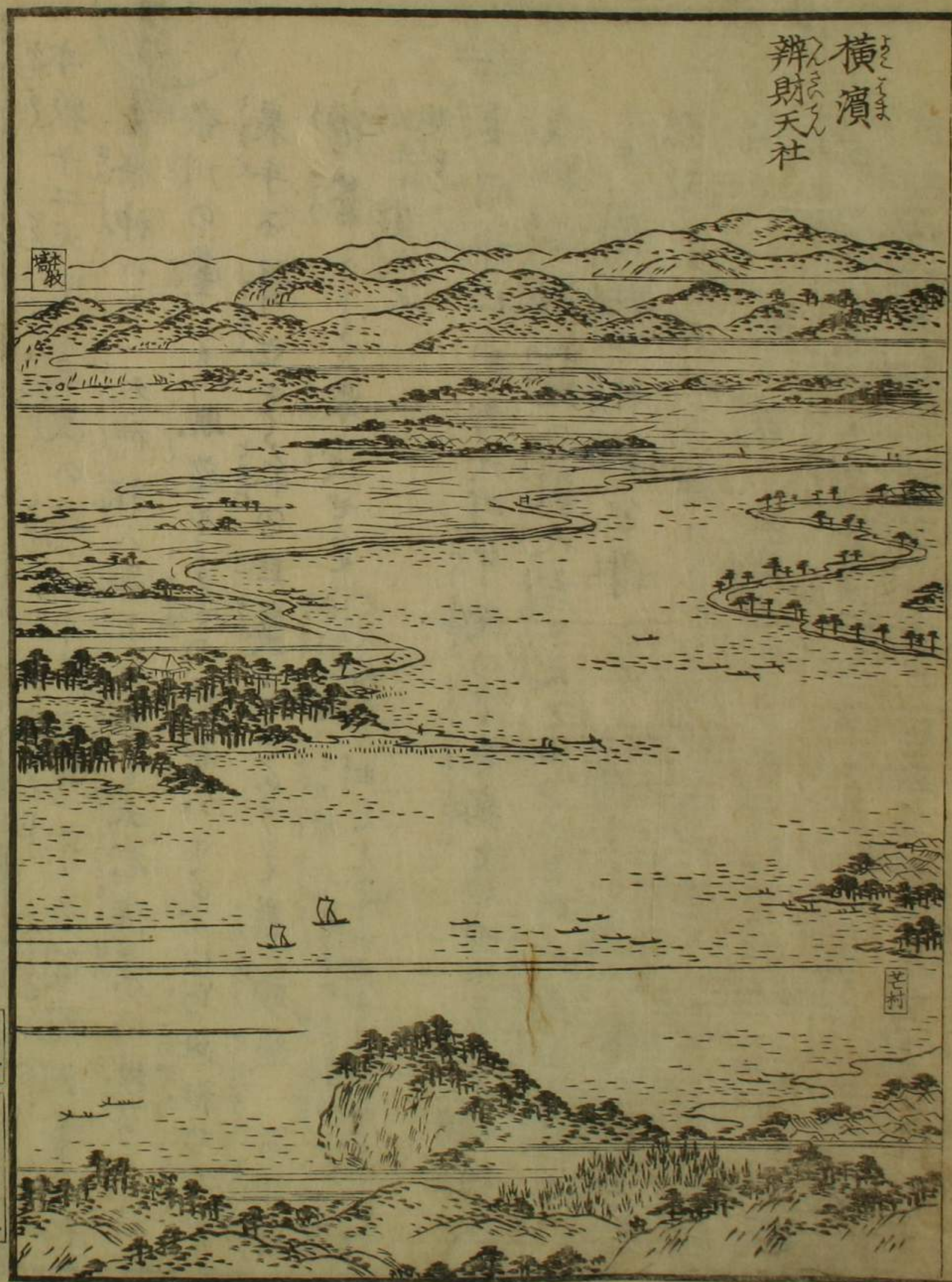
垂^た仁^に天^{てん}皇^{みかど}の皇^{みかど}子^こ日^{にっ}本^{ほん}武^ぶ尊^{そん}初^{はつ}の御^ご名^なとハ小^こ碓^{すい}命^{めい}と奉^{ほう}る

武^ぶ藏^{ざう}相^{さう}模^もの際^{まへ}と尊^{そん}の東^{とう}征^{せい}御^ご經^{きやう}過^かの地^ちとて以^{もつ}て所^{しよ}々^々り

昭和九年
七月六日
購求



横濱
辨財天社



六冊
三〇百二十九

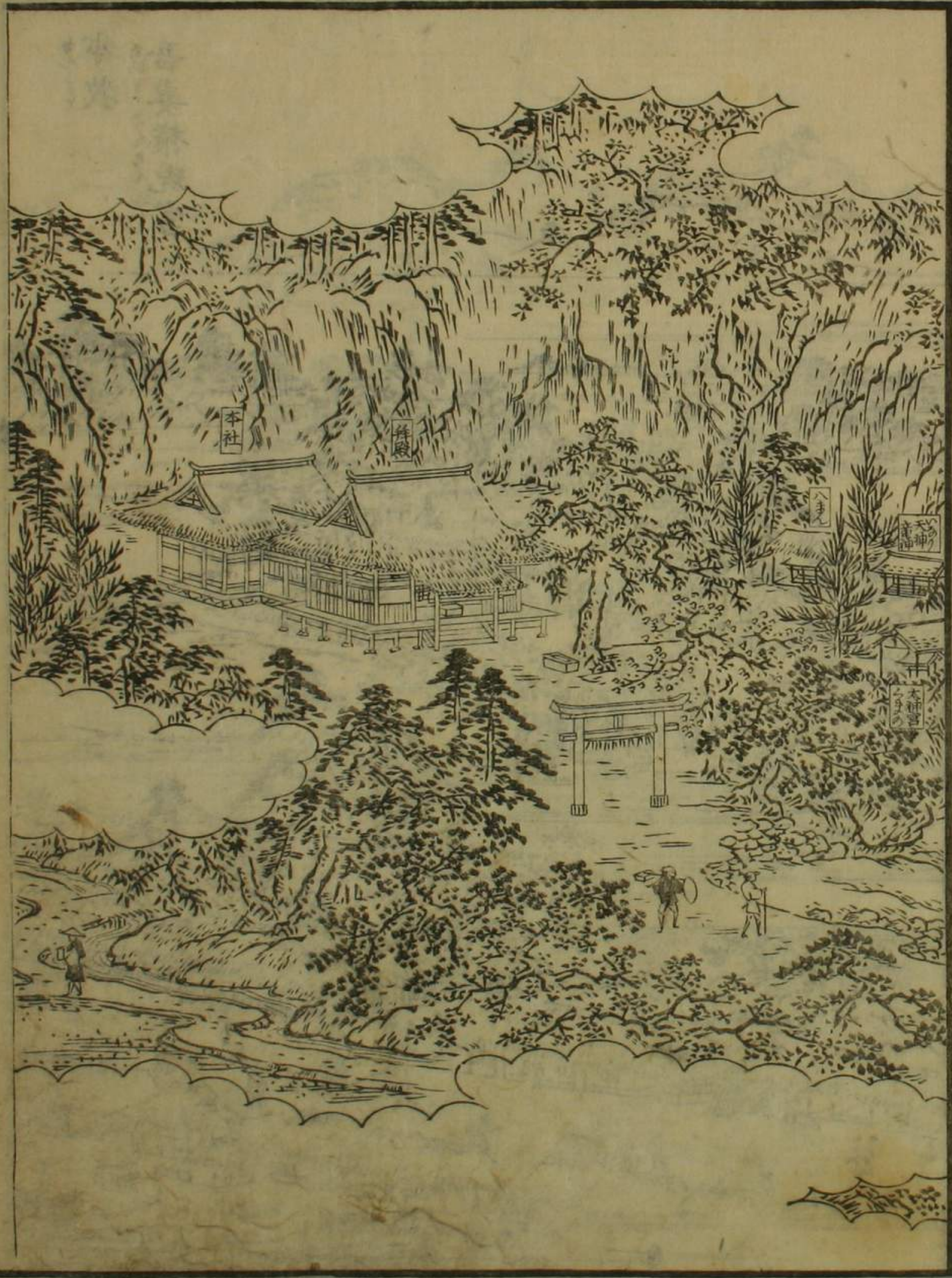


天
外

芒村
號島
此地ありも
海苔を産
まるといふ
呂川増
らすと云



二ノ百三十





本牧
吾妻権現宮



奉祀一々千歳御神威を仰ぎ奉るも鎮護國家の盛功未
 代よ及わりぬの故あるべし
 詳ある事ハ本所吾嬭森の
 下よ出るゆふふの孫に畧せり

杉山神社新町より八町あり北の方下星川村より延喜
 式内の神社中々靈蹟尤掲然たり今ハ日蓮宗法性寺と
 いふより兼帯奉祀一々釋迦如来を本地佛とせり例祭ハ
 毎年六月十四日修行也

延喜式神名帳曰 都築郡一座小
 杉山神社
 續日本後紀第七曰
 兼和五年二月庚戌武藏國都築郡粉山神社預之
 官幣以靈驗
 同書曰五年五月庚辰奉授武藏國无位杉山名神從
 五位下

按小判本の續日本後紀ハ粉山ヲ作ルヲ誤ナリ

帷子里芝生の南に並み往古ハ宿驛の名なり一々今ハ程ヶ谷
 驛に加へり小地名とあるなり
 此所を帷子と名け若間
 神戶の南にありを上帷子也



杉山明神社
すぎやまみょうじんしゃ
 延喜式内都築
えんぎしきうちづき
 郡杉山神社是
こほりすぎやまじんしゃ
 なり

新小寛永五年齊藤徳元の関東下向記に所の人小此里の君のつれを尋ねし海辺にありあり浦のありありなる所と云くかく名付たりと云へし一記せり

平安紀行 かくゆくと名つくる所あり

日比の里かかこをゆきて旅人の汗ふふあるかかこの里 持資

田國雜記 かくゆくの宿と云ふあり

つゆきと旅の衣とてまーゆきと名付るかかこの里 道奥 准后

鎌倉記行

かこの里のさあさありたつてゆきと名付るかかこの里

地白ある所のたつたむ馬をききと云ふかかこの里 澤庵

帷子川 下帷子の南新町驛舎の入口と流る 川幅十五間此流

小架を板橋と帷子橋と号く此川ハ同國都築郡白根の

辺よりゆき此地小至る下流ハ久良岐郡戸部村に経る

海小會を

程ヶ谷新町 東海道官驛の一なり

帷子町上下岩間町上下神戸町上下岩間の地を合せ一驛とせり

或ハ慶長或ハ慶安又ハ万治年間ともその説一がすすに茶家の分限帳の三郎と云人の所領小札の保土ヶ谷とありハ此地を昔ハ小札ハ属しと云ふ所なり神奈川より此地迄行程二里九町あり 驛亭軒と連糸繫

昌の地より

神戸川 神戸と上帷子との間の小川あり長二間と云ふ此板

橋を架しと号く 神戶橋と号く主人ハ水源ハ田間の水落集りて流

るをたし新町より右の裏と流る此地ハ至る末ハ神戸岩

間の左の裏を回りて帷子川に入

大神宮 神戸の地小あり街道の右側ハ烏居を建た大門

三丁あまりを入り社ありと神主岡田氏奉祀を祭礼ハ六月

九月両月の十六日中より九月を大祭の辰とを相傳へ往古

當社の御神武州御厨庄榛谷峯ハ影向なりあひと

後世川井二股川程ヶ谷宮林同所八坂等の地へ迂り

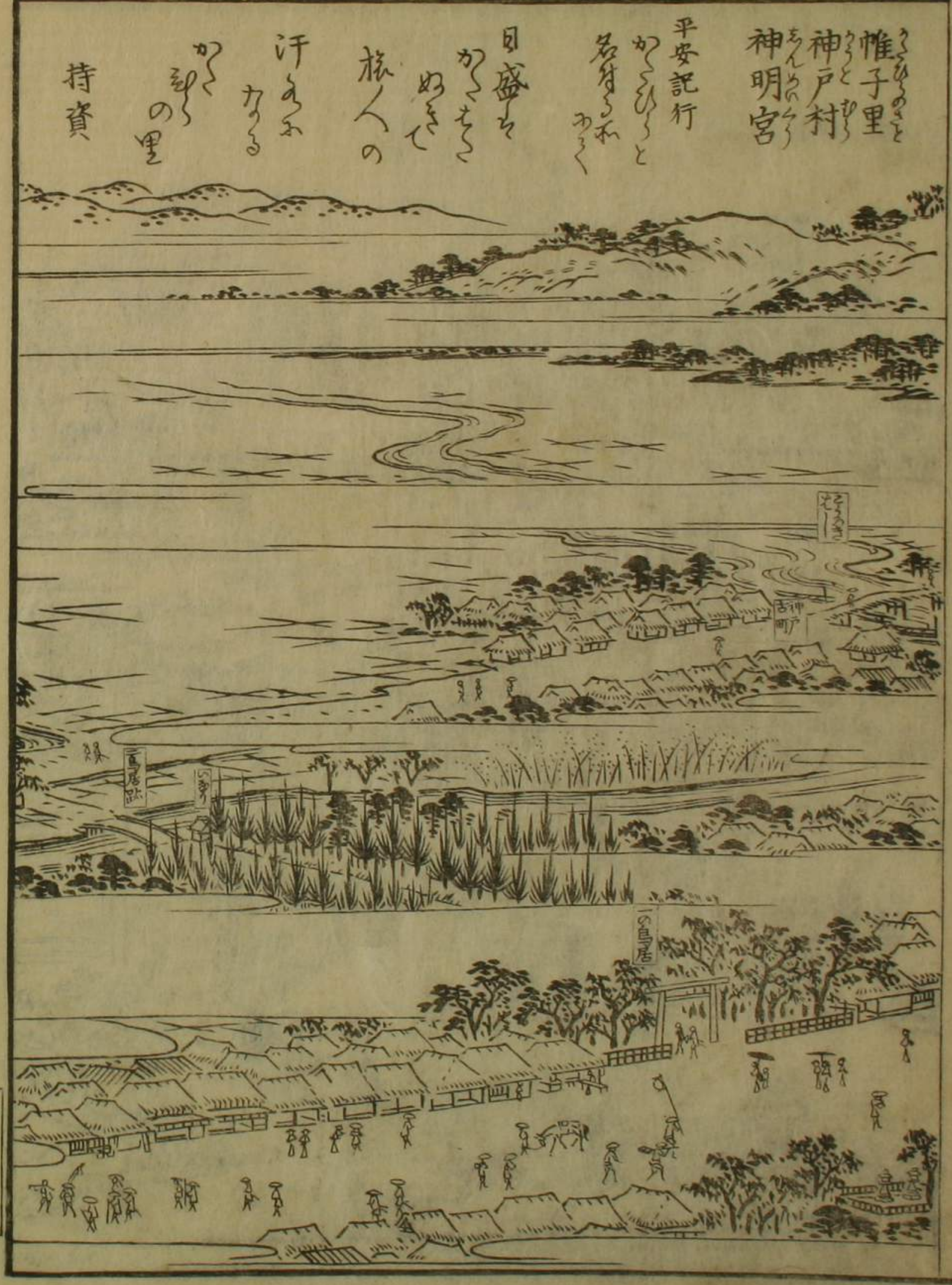
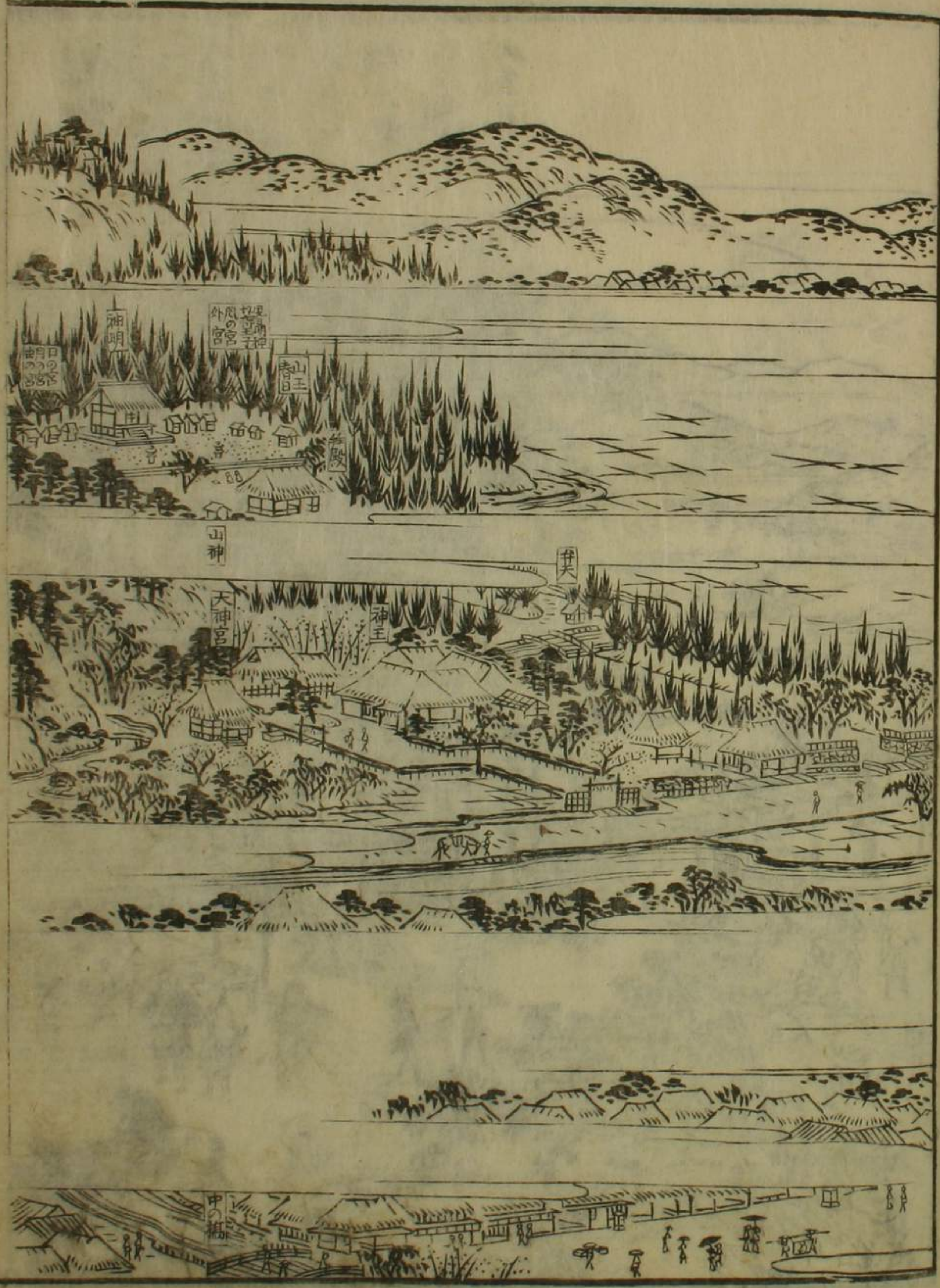
まゆせより一神託あるを以終る嘉祿二年九月十六日

此是武藏惟子郵
 別家十日經十州
 只思父母不姑舍
 夜々夢魂鄉里遊
 閻齊

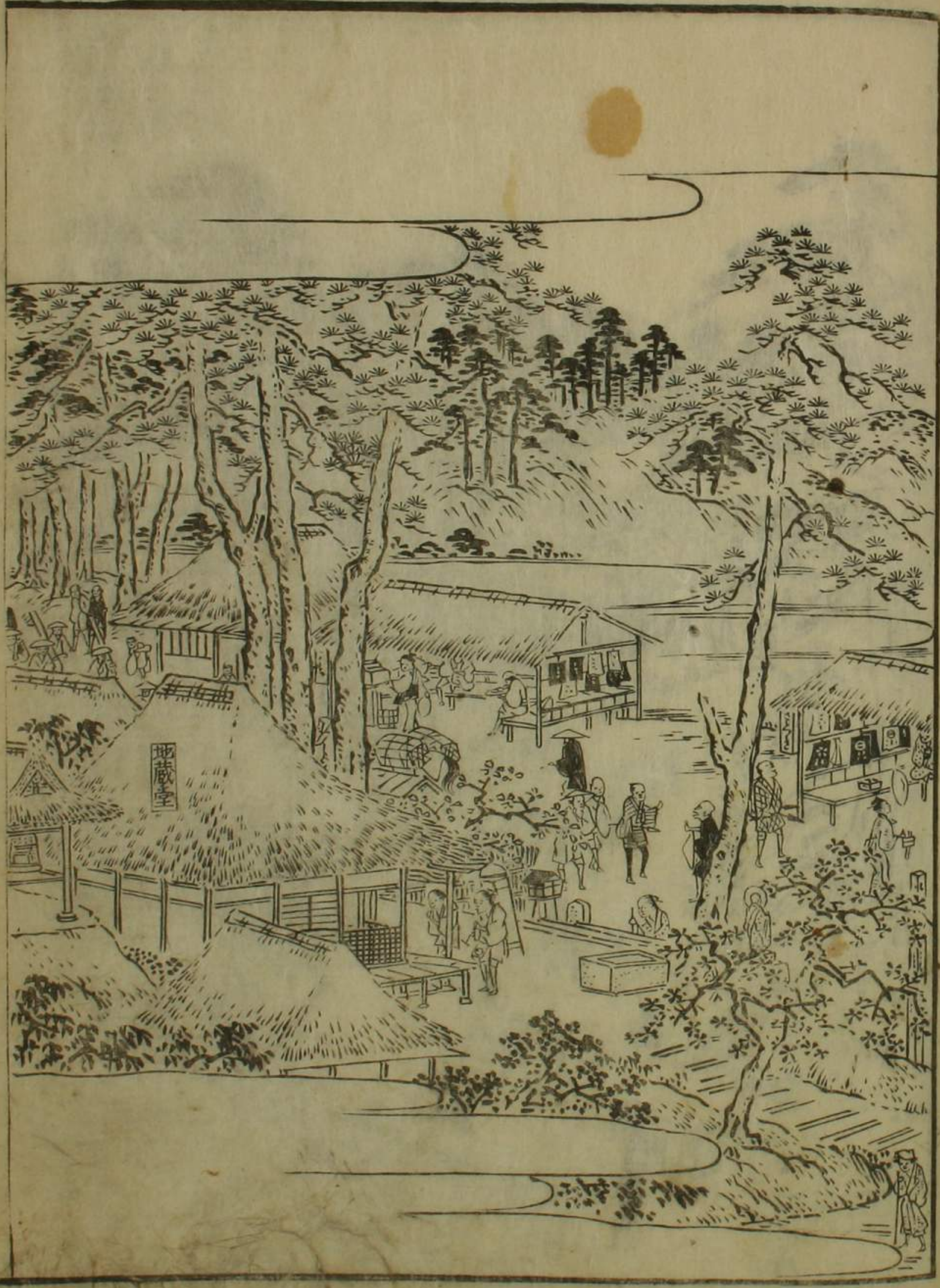


惟子川





平安記行
 唯子里
 神戶村
 神明宮
 日盛
 汗ま
 旅人の
 持資

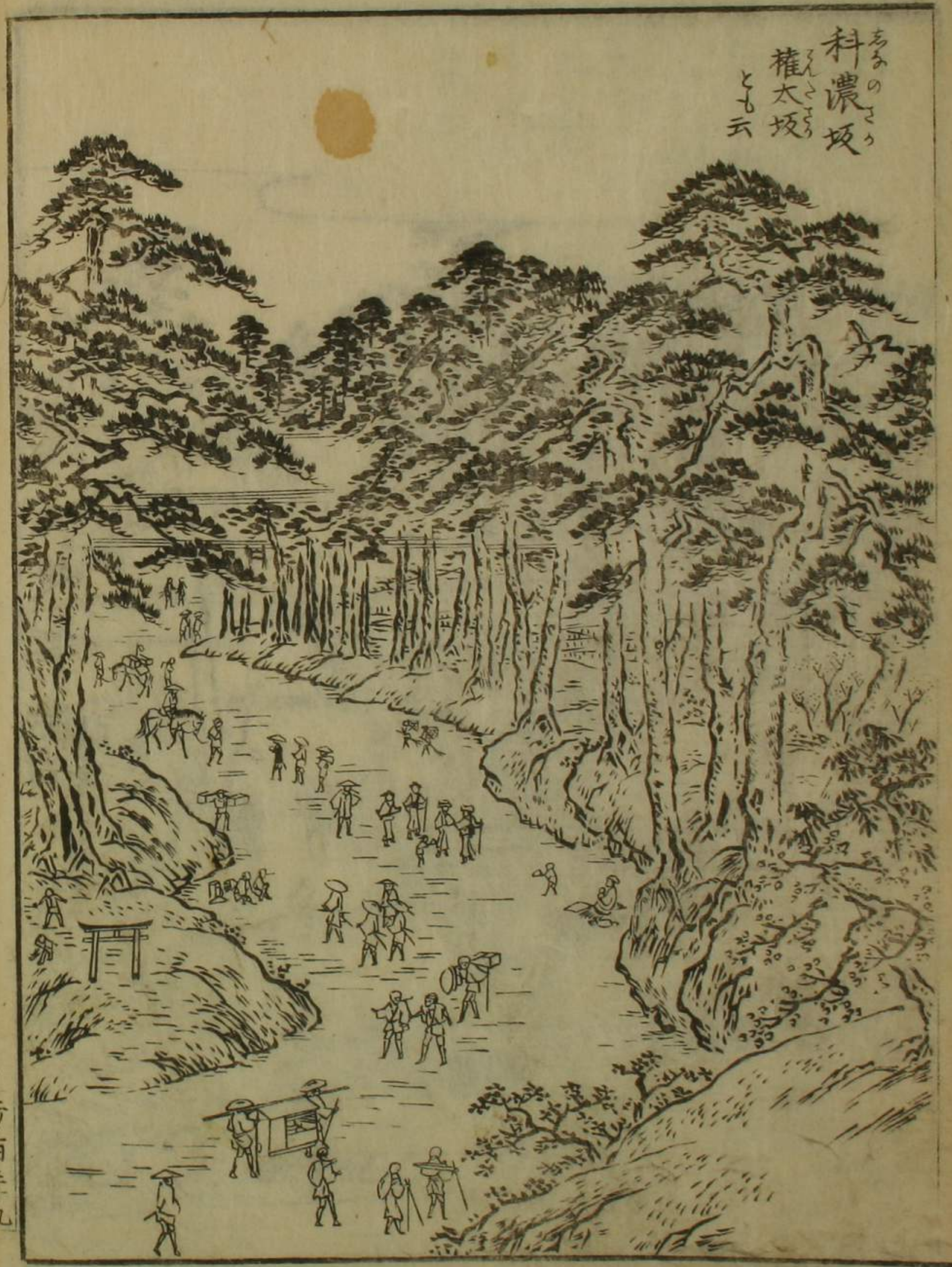


境木
 とんしん
 土人の称なり
 武蔵相模の
 境あり故に
 傍尔の
 柁を建
 らせし
 らるなり
 此名あり



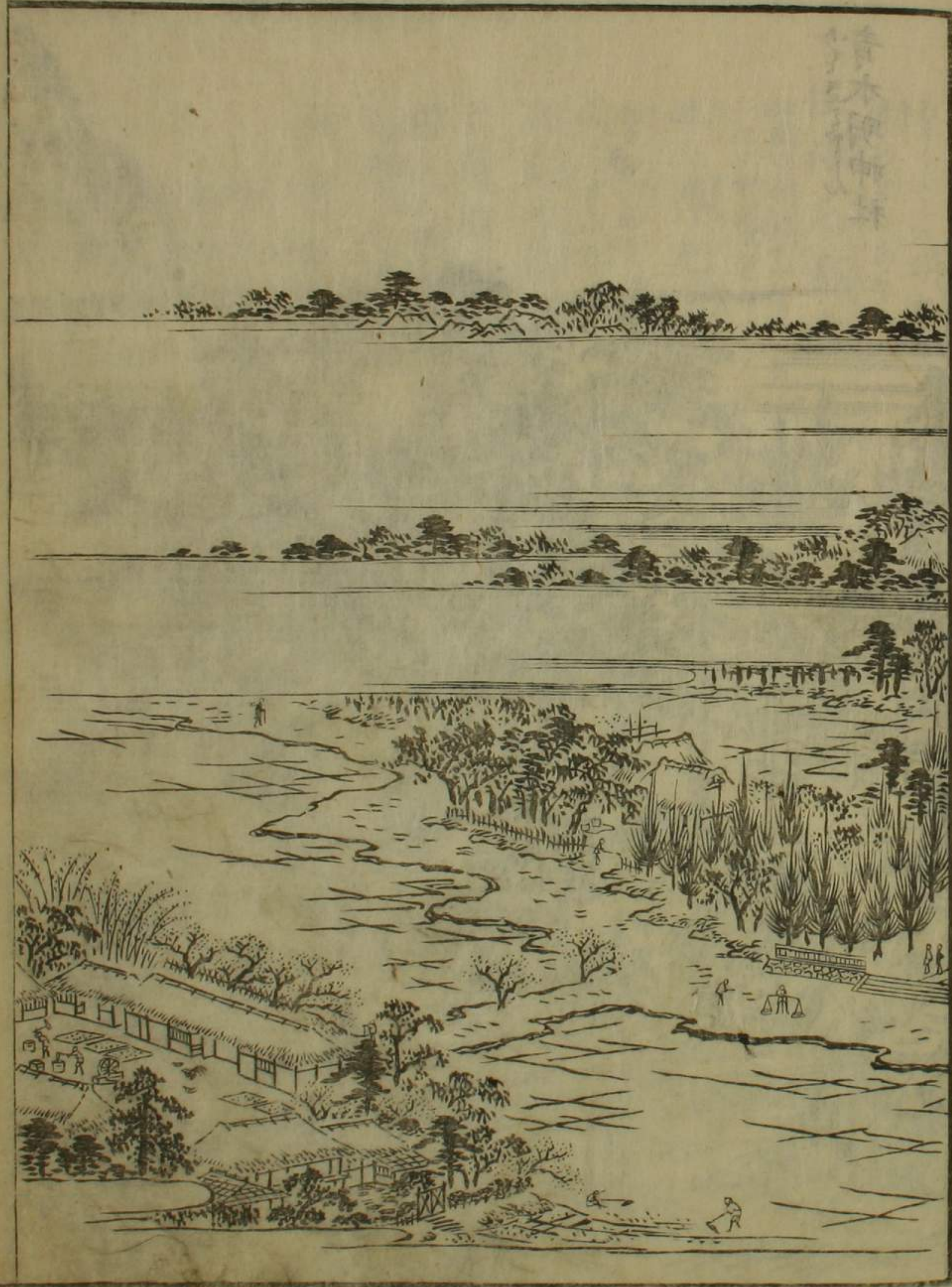


あまのこ
科濃坂
権太坂
とも云



此山上より迂一せし又元和二年三月三日今のゆく平地へ
 宮居を造立せしと云見目河神田春日河天神町等の地より
 古町街道 芝生の追分より下帷子の右の裏通りを程ヶ谷の
 元町へゆる通路ゆく行程十八町をゆくあり則古の街道
 なり万治二年或ハ慶長或ハ今のゆく通路を改られしより裏
 通より古町街道と稱し今の驛舎を新町と名しなり
 惟子橋造香の此古町
 街道と往還の通路とせし
 界木 立場ゆき道より右よ武蔵相模の國界の傍尔城
 建よりある此稱あり此地牡丹餅を名産とせ是を製する店
 兩三家あり
 品野坂或ハ信濃又俗ハ権太坂と稱し此地ハ武相の國界あり
 坂路の両傍ゆを蒼松の老樹左右よ森列とせ坂上ゆく
 右と望めハ芙蓉の白峯玉をけつるゆく左を顧むる

鎌倉の遠山翠黛濃中々実ハ此地の風光ま々一奇觀
 と稱せし春日山日記に謙信鎌倉鶴岡社恭乃節
 江田稻毛小机小杉権現山品野坂杯云海道筋あり
 この岩を討敗とありハ此地ゆ中世小墨あり
 蔭田城跡 新町より金澤通道蔭田村の内蔭田橋と
 城山と号く封域東南ハ一町半計南北ハ二町餘あり
 小丘なり此地ハ久良岐往古吉良左兵衛佐義門此地に住す
 と云小田原記永祿十年武田信玄小田原を襲んとす条下ハ王子筋へ信玄
 神大寺左兵衛佐居住なり左兵衛佐其項大橋山城守康忠北見關加賀守備頼相
 人此妻女の宅と焼せし多目周防守と者其項青木と居住し栗田藤巻
 此妻女の宅と焼せし多目周防守と者其項青木と居住し栗田藤巻
 折云同心とを連れて蔭田と守護しゆる輕部豊前守泰則とあり蔭田



清水御所



兼蓮寺
二住禪尼影堂
住吉明神社

青木明神社



ありてハ各吉良のやきの前ある山小のりて鑑池とありけはれハ敵と
 米らをしてあり

二 位 禪 尼 影 堂 井 戸 谷 村 兼 蓮 寺 といふ 西光山と号し古義真言
 宗石川室生寺に属す

二年物章とあり慶安 真言宗の境内佛殿の側あり相傳ふ此
 地ハ禪尼分領の地なりニ公の生前自影堂 尼公の肖像ハ

等身あり四十計の繪なりと建く兼蓮寺と号せし其後度々
 右のゆゑ念珠と持しあり

兵乱の為ニ破壊せしと秀善法印勸進の功を慕ふ寛永
 十年癸酉影堂と再興せしものなりハ梁牌

書ける際あり二位尼 其の文左
 平政子の牌ありとのみ 其の銘ニ詳なるを

梁 牌 銘 曰 二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

二 位 尼 者 北 條 四 郎 時 政 卿 息 女 則 右 大 将 家 北 方

寛永十癸酉年三月十一日

大檀那開宮産次郎忠次
別當 兼蓮寺 秀譽

東鑑脱漏曰嘉祿元年乙酉七月十日庚午丑刻

二位家薨御六十九歲是前右大將軍之後室二代

將軍女儀也前漢之呂后而令執行天下給若又

神功皇后令再生令擁護我國皇基給敷云云

按二當寺梁札の銘二二位禪尼逝去の日を嘉祿元年七月十三日とせ
東鑑脱漏七月十一日とせりて證とせりて欲

瑞應山弘明寺全澤通道より十四丁歩右の方へ入る弘明

寺村あり坂東順礼札所の第十四番目なり當寺を

弘法大師開創の佛刹なり中興を光慧阿闍梨と号

古義真言宗石川室生寺に属せり毎年七月十日十二月

十八日市立く大賑ハハ

東鑑曰治養五年正月廿三日於武蔵國長尾寺
并求明寺等者以僧長栄可致沙汰之旨被定下是

源家累代祈願所也云云

本堂本尊十一面觀世音菩薩
佛龕背面銘曰中興光慧阿闍梨注

荒木作表本有横削横度十方立像堅救三世長六

尺約六丈十一面頭果地各行基示深旨也

天満宮
本堂の内右の殿檀をわき背浪華の依客某菅神の像一軀を

携へ來り是を售むと欲せしむる人を買人をと云寺主喜躍

しつゝ價を同旅客笑ふ云く我有縁の價を求むらんを世宝とせ

神と稱し中院前内大臣通茂公の御門業相若氏某に此地ありと崇め

神と稱し和乎のふあはる大は感應をゆきを因り神恩を謝し

神殿造營せしと云



本堂の向拜と掲る

大角信勝筆

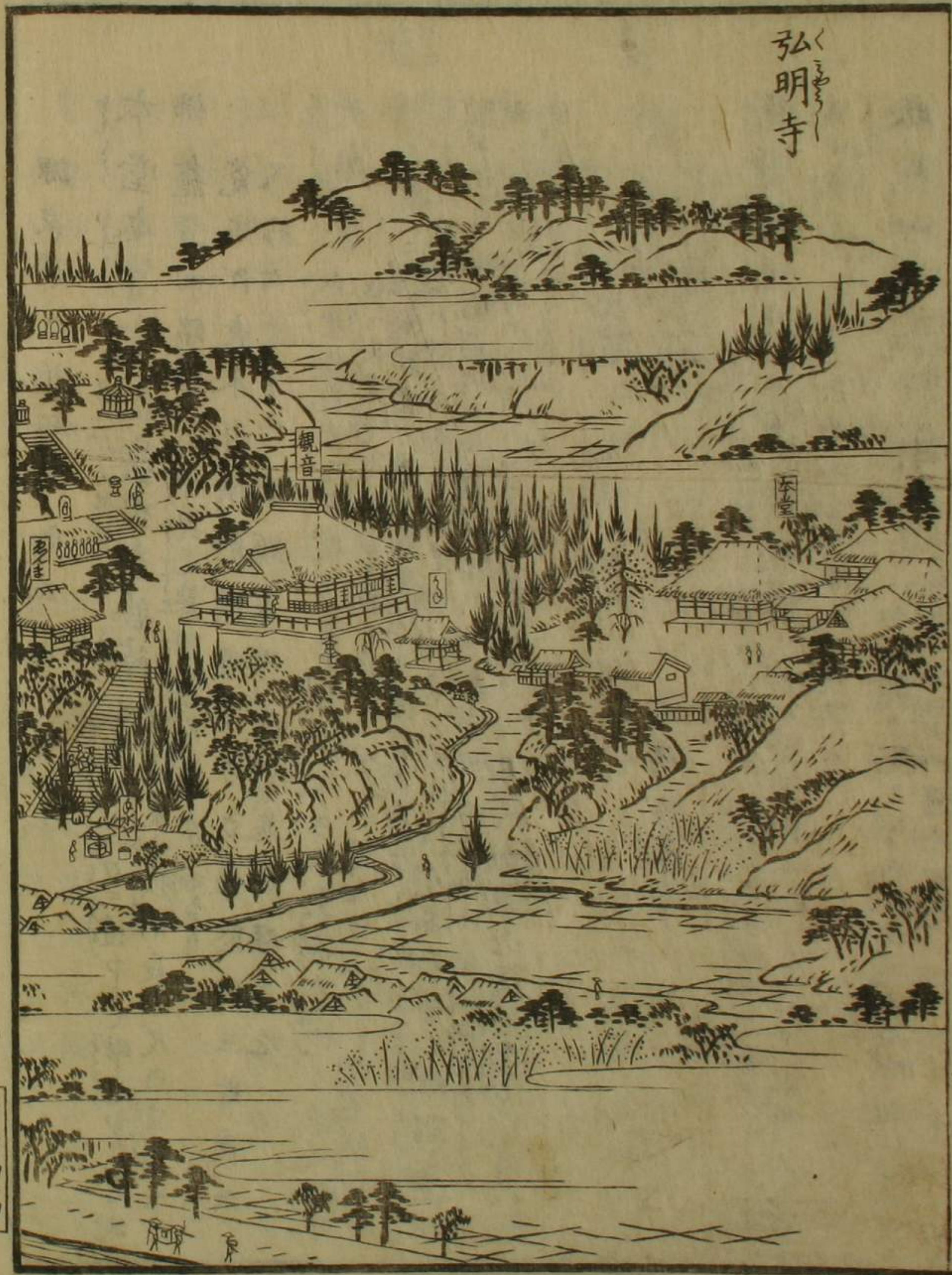
熊野権現祠
本堂の左の方七ヶ坪ありて往古行基大士此地に至るありし時

鳥小乗まじりて熊野権現とせり由縁起

麻身山熊野祠
阿加井ありて起り弘法大師獲摩壇の跡と稱し是を起るあり



弘明寺



三ノ百四十四

神明宮



鯨鐘

堂前右の坊坂の上あり、田鐘、弘安九年九月廿五日鑄治のちて願主
法印長慶と名を注せり、今の鐘ハ寛政十年に改鑄せり

七ツ石

若神堂奇異の靈石中、自ら現れ自没する恒に其在所とあり、
然ハ材敷金銭等漏るべく輻つたり、頻年御堂の再堂を企つたり、
同郷檀家の庭中より知り、寺僧喜ひ、當寺境内に安んず、
徒ク不日ハ工匠の資財を果して、明和三年造営の功と全くとす、
具ハ靈驗集に記せり、此石今二王門の傍にニツあり、
存ハ當寺表門の前耕田の中にも一ツあり、
共ハ四ツハ今現然り、其餘の所在ハ未だを

二王門

石階の下あり、金剛密迹の兩像ハ運慶の作り、各九尺餘、
木像あり、額ハ瑞應山と筆し、
佐々木玄竜の書なり

小田原北条家制札

永祿十年丁卯十月二日
石巻彦六郎書り

同寺領寄附證文

天保二年癸卯二月十八日
石巻勘解由左衛門書り

本尊縁起曰人皇四十五代

聖武天皇の御宇行基大士東國
遊化の頃此地に至り、あまの空中小白蓮乱飛り、山上

散墜を大士怪む

山に登り、果てしなく神人のあせり、
白狐を乗し、一ハ靈鳥を乗せ、
今境内は鎮座の熊野各大士、
告て曰く去る養老年間、
印度の善無畏三藏遠く我

告て曰く去る養老年間

印度の善無畏三藏遠く我

告て曰く去る養老年間

印度の善無畏三藏遠く我

告て曰く去る養老年間

印度の善無畏三藏遠く我

告て曰く去る養老年間

印度の善無畏三藏遠く我

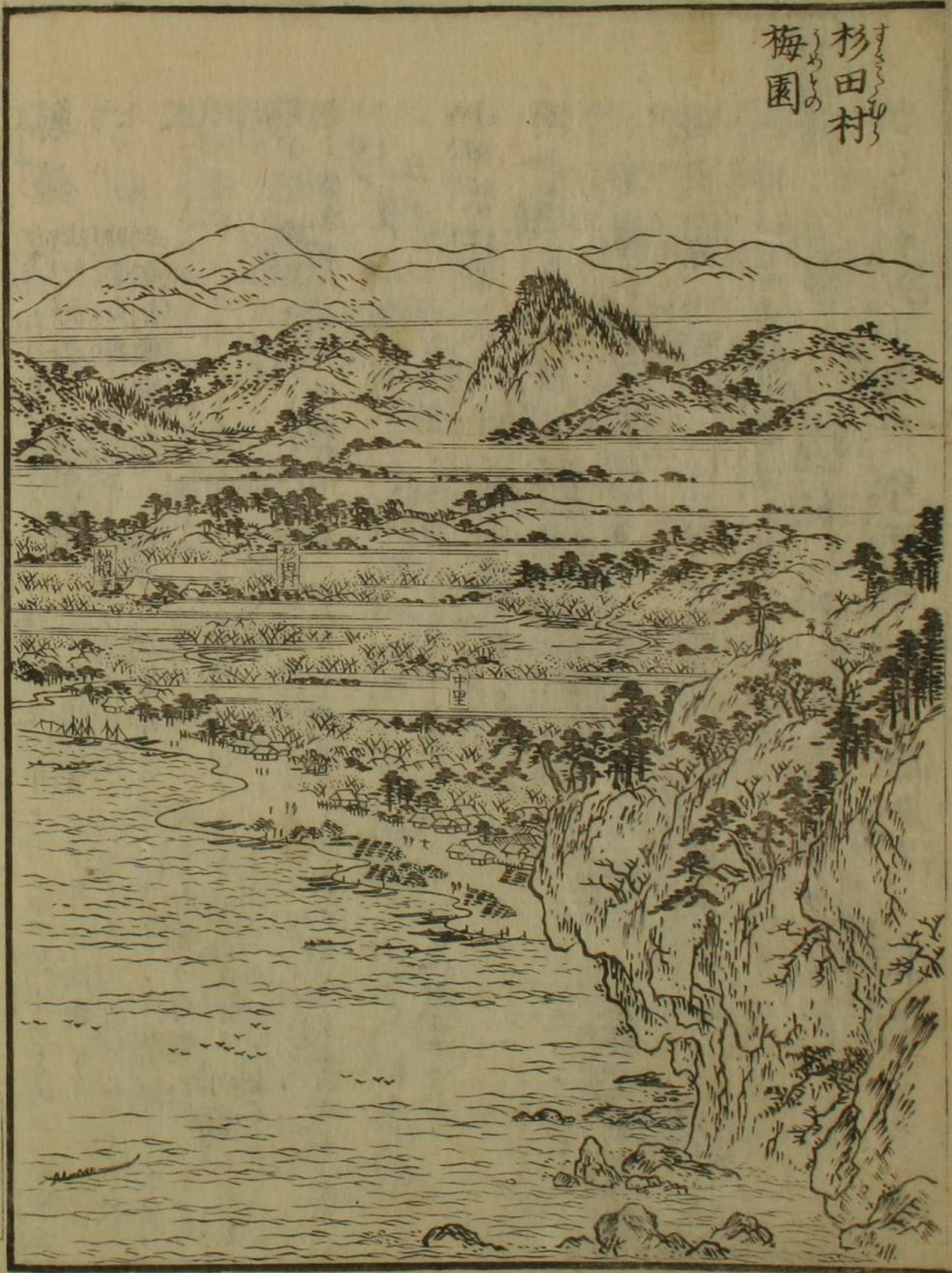
告て曰く去る養老年間

印度の善無畏三藏遠く我



梅
香
よ
あ
や
帆
舟
蓼
太

杉田村
梅園





杉田村
海鼠製



日本の土小渡も密教の機縁を要むと云々終小此地小来
 心と止り七箇の蟠石と加持所謂七石又其石小陀羅尼
 を書寫此山小鎮く結界云託て方と云々人
 あふ於く大士善無畏の素懐を鑑十一面の尊像一軀を
 彫當寺の本又弘仁年間弘法大師此地錫を飛
 無畏三蔵の舊を興行基大士の跡を継く大悲者淨
 刹と初伽藍安鎮の爲四臂の不動を作
 密教護神の法樂を般若心徑を書寫人法繁榮の
 爲一千座の護摩を修且大黒愛深此字の宝塔
 一基是皆大師の製多の遙後長曆の頃武相の
 間疫癘流行人民大是を患時小當寺中與光慧
 阿闍梨本新此疫災と除滅せと云々
 此地ハ六浦莊の内吉田兼好法師此地住れ

絶妙の勝地なりと稱せられ往古巨勢金岡此地の勝
 景を摸畫む及筆と投嘆賞を大明
 心越禪師ハ其佳景西湖似と云々其八勝准疑
 八詠の詩賦あり

泊々洲崎晴嵐
 静行雲流水自依依
 清瀨消々不繫舟風傳塵籟正中秋廣寒桂子香
 飄處看水輪島際浮
 暮雨涼亦驚甘泉洞々聽分明蓬窓淹蹇無
 相識斷君山鐵笛聲
 朝乙識歸帆連天無恙輕帆掛日邊款乃高歌落
 雲外依萬派遠帆連天無恙輕帆掛日邊款乃高歌落
 風稱名晚鐘數艇到洲前
 生悟一片藍成鐘晚扣若鯨音幽明聞者咸

涼
 やさ
 折
 是ハ
 筆
 擲
 松
 西山
 宗固



能見堂
 擲筆松
 此所より
 金澤の勝
 聚を平臨
 する園ハ
 あり



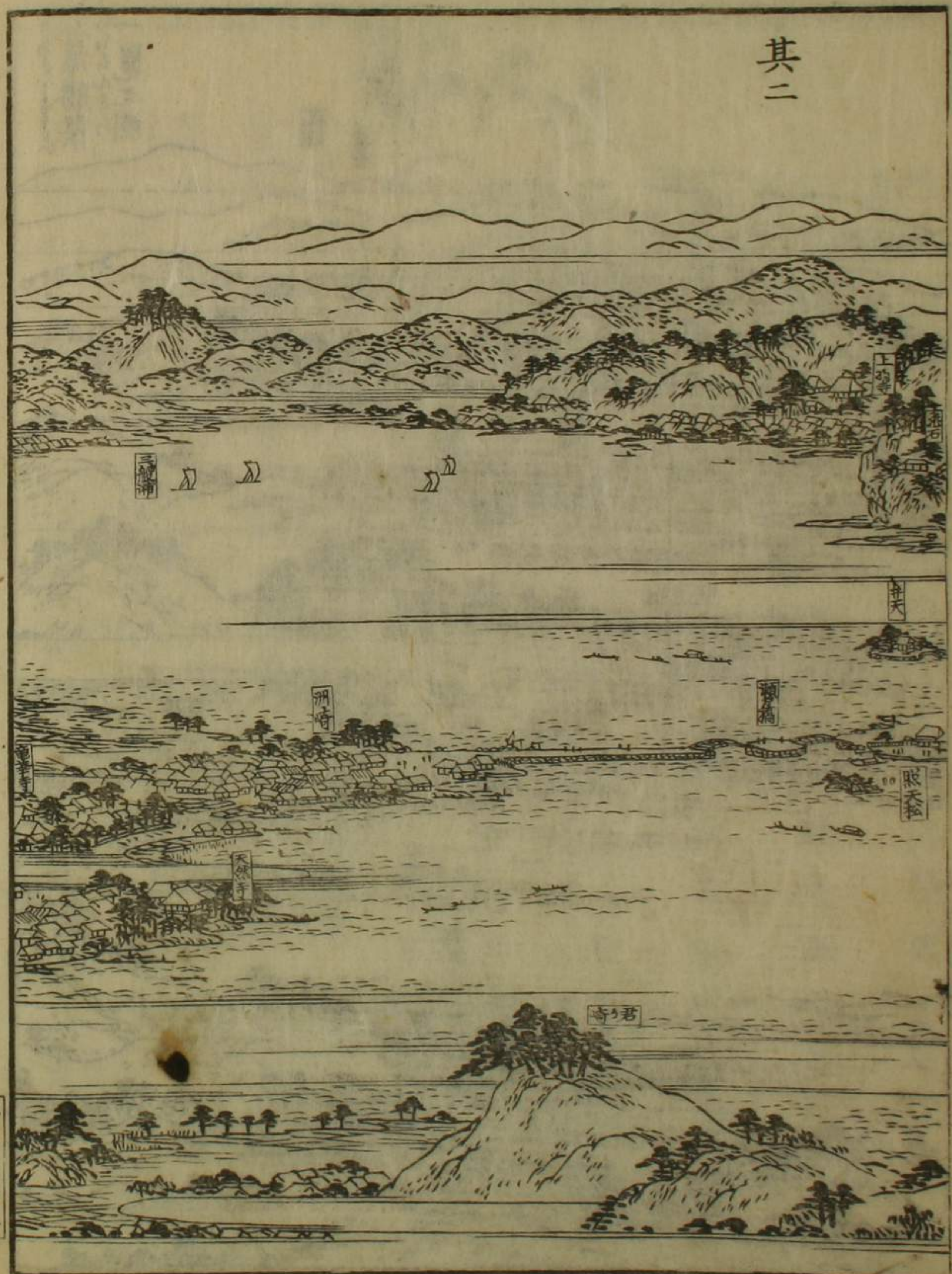


列陣冲冥堪入塞荻蘆蕭瑟幾成隊飛鳴宿食倦
 棲進千里傳書誰不愛
 廣內川暮雪沒潛奇花六出以鋪練渾然王砌山
 河色遍覆危峯露些尖
 獨羨漁翁是作家持竿盪漿日西斜網得魚來沽
 酒飲披蓑高臥仕堪誇
 武州金澤擲筆山能見堂有蒲相八景之風味因觀
 鍊倉志甚詳一夕寥寥對青燈漫賦八景之陋句以
 識斯勝境云歲執徐夏日
 東阜越杜多艸

能見堂 金澤稱名寺の良の山上より禪宗の草庵あり
 本寺の地藏井ハ惠心僧都の作也一寸八分有りと云
 後世立像二尺五寸計の地藏菩薩を作す靈像をハ
 其胎中より云故に此草庵を地藏院と号す
 近世久世和州侯源廣之建立あり
 能見堂の二ツの額を共小心越禪師の書なり
 巨勢全岡なるもの其真景を写さんと筆比及ハざる



其二





以絶倒絶倒のつげん堂と云と梅花無盡蔵は濃見

堂は作る或人云此地より望む八瀬戸の八勝まで皆能見

故に能見道と云とつげん堂の松と云は立より金澤を下せ

澤庵和尚のうらり記は能見堂の松と云は立より金澤を下せ

詞中及能化堂の作られ

擲筆松堂前は存まらぬの大松を巨勢金岡此地の勝景筆中と

梅花無盡蔵 出金澤七八里許攀最高頂則山々

水々面々之佳致昔畫師金岡絶例擲筆之處有

名無基但其名不甚佳相傳曰濃見堂也中畧又

云畫師擲筆之峯云云 萬里居士

登々匍匐路攀高 景集大成忘却勞

秀水奇山雲不裏 畫師絶倒擲秋毫

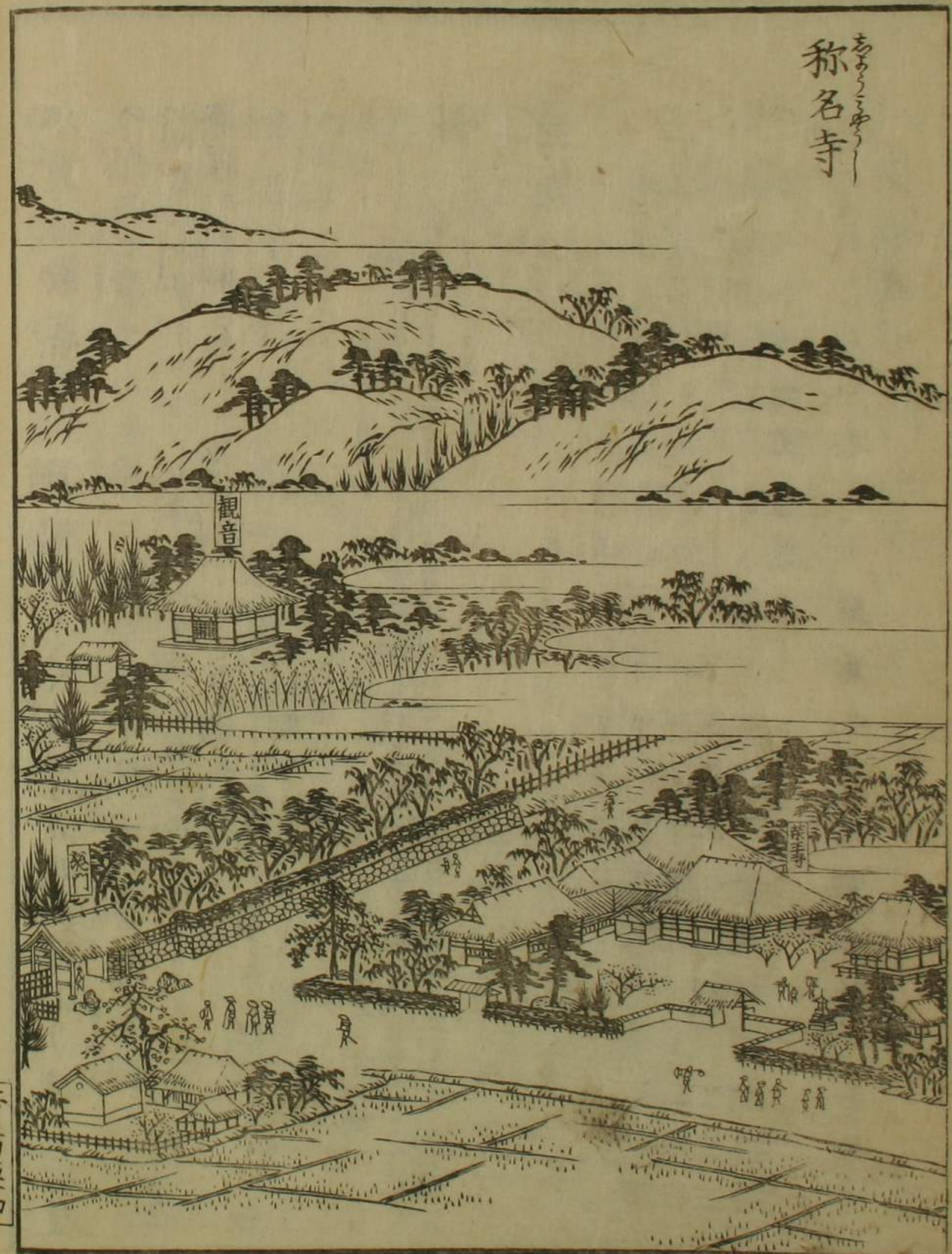
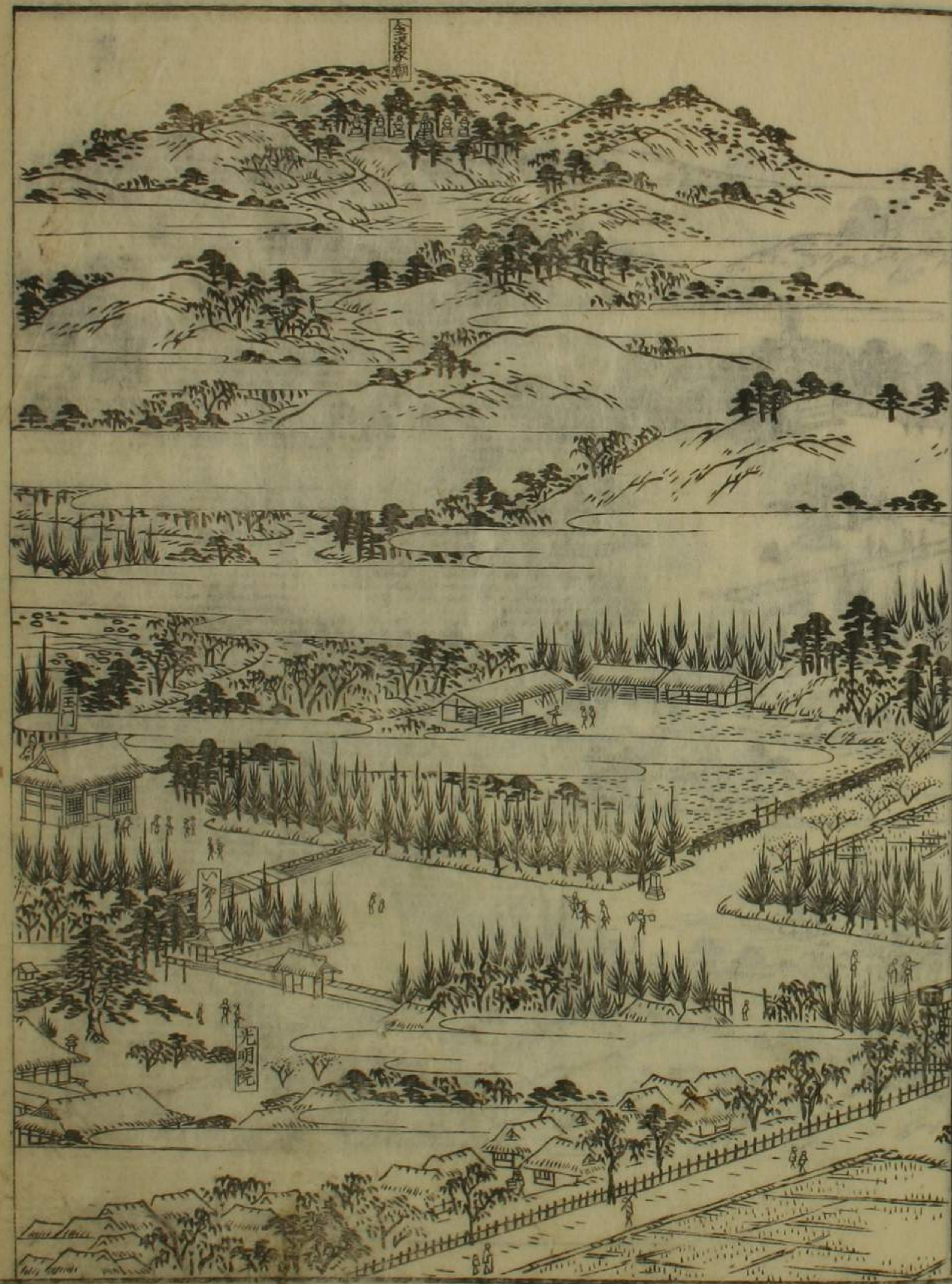
淨 西山 宗因

此地に至る金澤の勝景を望む八畫は南より西

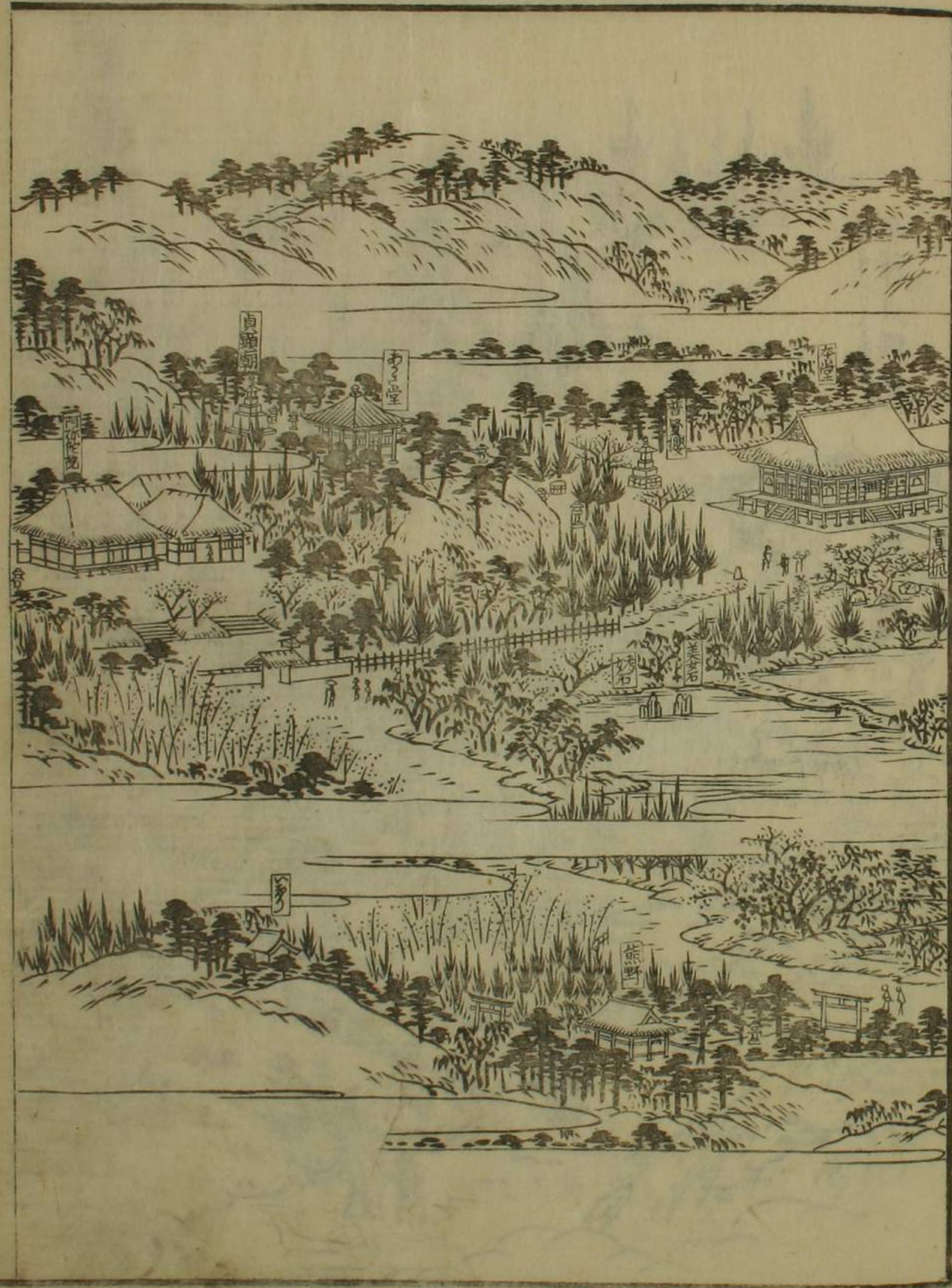
北よめりのくハ皆山中東ハ滄溟に連る千里の風光
窮りなく沖舟の真帆片帆ハ雲小入りとあやハ
瀬戸の神祠ハ水は臨み称名の佛閣ハ山ハ傍り漁家
氏屋ハ樹間くくハ島嶼ハ波間くくハ
又齧戸の烟潮水の盈虚も皆此擲筆松の下平臨
秋冬の變るる千態万状極りなく開左の一勝地
ありとも松島象泻の風致ありと以雅客遊人留連時と
移せりとも其十ろ一と究り能つと

金澤山稱名寺 町屋村にあり 弥勒院と号に真言律に
南都の西大寺は属を當寺ハ龜山帝の勅願所なり
北条越後守平實時の本願其子頭時の建立なり
法名と慧日と号を靈牌ハ弘安三年三月二十八日に卒せり

本尊弥勒菩薩ハ唐佛なり立像五尺五寸あり傍に蓮慶
の作の地藏菩薩の本像二軀と安を開山ハ審海和尚と号す
小田原北条家分限帳に金澤稱名寺領金澤伏せあり又氏綱の三男
兼壽王所領の内は金澤稱名寺分とあり地を注し加へり
愛染堂 堂あり此堂一切を収蔵せり當寺元亨三年
大結界の圖に三重塔と注し道興准后の回國雜記に稱名寺と
又澤庵和尚の鎌倉記行中本堂一字あり諸堂皆跡をり五重
鐘樓 本堂の東あり
大日本國武州六浦莊稱名寺鐘銘
諸伏魔力怨除結盡無餘露地擊捷槌菩薩聞當集
諸欲聞法是人度流生死滅聞此妙響為樂當切衆生
悉有佛性如來常住無有衰易一聽鐘聲當願衆生
斷三界苦願證菩提
文永己巳仲冬七日奉為先考先妣結緣人等同成
正覺鑄之



寺
名
稱
名
寺



金澤頭時墓



金澤貞頭墓

大檀那越後守平朝臣實時實泰谷禪尼

宋入宋小比丘 圓種迹 慈洪書

改鑄鐘銘并序 此鐘成乎永序 力并募士女更 伏乞先考超三 於光世音聖乎 洪鐘之起其始 實備九乳形象 三朝之夕趣無 之朝之夕趣無 正安辛丑仲秋九日 大檀那越後守平朝臣實時實泰谷禪尼

大檀那越後守平朝臣實時實泰谷禪尼 法名慧日當寺住持沙門審海行事比丘源阿大工

金澤頭時墓 當寺大檀那阿弥陀院の山の中腹にあり 同貞頭墓 高七尺餘の五輪の石塔あり 高五尺餘の石塔あり



六浦秘法日荷上人
 称名寺の住僧と
 蔵ふ墓と圍む彼
 寺の二王と
 賭物と
 上人勝り
 くれは終ふ
 これを負く
 甲州身延
 山へ至られ
 一と云
 大力無双の人
 なり

前朝金澤古招提
 梅有西湖指枝拜

遊十年遲雖並臍
 未開遺恨翠禽啼

一横枝上粘西湖
 意外春風真假合

名字斯花別不呼
 傍人定道益成圖

櫻梅

同所あり花ハ重瓣
 同所あり一員なり

普賢象

本堂の前左の隅あり一品に
 一室 鐘樓の後あり門に

文珠櫻

同所あり普賢象の對
 今ハ荒廢せり澤庵和尚の鎌倉記

一室

鐘樓の後あり門に
 室と書せし額を揚ぐ

阿弥陀院

本堂より左山の傍あり
 運慶の作あり此二像ハ杉田村東禪寺

二王門

樓門の左右に安置
 所の金剛密迹の像を

熊野新宮 此の西岡の上あり
 當寺の鎮守なり
 祖相謙の舍利と号し
 代々弘法大師大和
 龜山帝の勅にあり

寺寶佛舍利

熊野新宮 當寺の鎮守なり

祖相謙の舍利と号し
 代々弘法大師大和
 龜山帝の勅にあり

當寺へ後納すとのり昔ハ
 彌勒佛泥塑像
 長三寸座像
 弘法大師の作あり
 愛深明王金銅像
 龜山帝の御念持佛
 請雨經瑜伽論
 共ニ管丞相の真跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行ニ十五字あり此論ハ一部百卷
 紀州高野の金剛三昧院ハ一巻江州作生島ハ一巻以上合せ八巻ハ今尚存
 枚舉せしむ違あり

大界外相圖

元亨三年當寺結界の圖なり其光景尤大廈高堂小
 元亨三年癸亥二月廿四日

鳩摩師極樂寺長老恐公大德
 答法多宝寺長老俊海律師

當寺本願越後守實時及ひ顯時貞時貞將等の西像の
 懸幅あり

楊貴妃玉簾一連

梅花無盡藏曰
 遺恨矣珠簾猫兒

初尾州熱田ありしと龜山帝の勅あり當寺ハ
 融目云云名寺水晶簾唐猫見之孫一大時教及郡書

蓋先代貯焉
 又曰寺祕件々之物容易元使人看之也

回國雜記

巻の長三三寸四寸ひろく四尺半の幅あり水精の
 中りしものありしは九花帳の御衣なりしものありしは
 道與 准后

北條陸奥守制札

金澤阿弥陀堂称名寺領敷地并垣場等事

右於當所軍勢并甲乙人等不の致咎妨根籍若於
 令遠取軍着為被處罪科の被注申交名々状依仰
 執達如件

康安二年五月廿四日

陸奥守 印

永享十一年称名寺領結解狀
 註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛結解状事

合八十貫文内

六十九貫六百分

八貫文

一貫文

八百文

三百文

三百文

已上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日

政所憲意判

當寺北条家繁昌の昔魏の巨藍なりの物換り
星移り堂宇多く破壊し今ハ山圍と古木皆えく松杉

梢とありそ常小鬱くあり房宇せえそりく寂寞の

扉と閉ち座禪觀法の床とありるに似く

金澤文庫舊址阿弥陀院の後の畠といふ東野文集寺前の

冒と相傳北條越後守平顯時宮建せるありく内に

和漢の羣書と納め儒書を墨印佛書ハ朱印を用

印文ハ楷字をして堅ニ金澤文庫の四字と注す印章の

吹よ後上杉安房守憲實執事よりし時再興せりとと

其後ハ荒廢し書籍散失せりとなりし丙辰紀杉越後守

清原の教隆ハ群書治要を讀せりと余ハ後に文選清原の師光左傳教隆

其外人家ハありるも一部となりし東見記云金澤文庫内ハ左傳の卷本三十卷

中原師光ハ跋ありとり鎌倉志ハ一切経の切残りとるもの弥勒堂ハありと云

印面大サ
共如圖

金澤文庫



金澤文庫址
 所々谷



鎌倉大草紙云武州金澤の學校ハ北条九代の繁昌此
 昔學問あり旧跡なり是れ今度彼文庫を再建
 種く書籍を入置又上州ハ上杉々分國ありこれハ
 足利ハ京并鎌倉ハ名字の地あり他ハ異なりや彼
 足利の學校を建立し種々の文書と異國より求め
 納る此足利の學校ハ上代兼和六年ハ小野篁上野
 の國司より一時建立の所同九年篁陸奥守ありて
 下向の時此ハ學校を建る由其旧跡今残る
 ざるを應仁元年長尾景久ハ沙汰とて改所より
 今の所へ移る建立しる近代の関山ハ快元とて禪
 僧なり今度安房守公方ハ名字掛の地あれハとて
 學領を寄進し彌書籍を納め學徒を憐愍せしハ
 此項ハ諸國大に種々學道絶るハ此所日本

一所の學校とある是より猶以て上杉安房守憲実と
 諸國の人を招めざるハ西國北國よりハ學徒悉く
 集ると云々

觀金澤藏書而作
 遺人來義堂藏書
 玉帳修文講武餘
 遺快乘晴走蠹魚
 牙籤映日窺蝌斗
 鄰侯三万欲何如
 北上一編看不足
 收在胸中壓五車
 照心古教君家有

慕景集
 二月將菜金澤の文庫
 日向勝元の御
 日向勝元の御
 日向勝元の御

丙辰記行
 懷古淚痕羈旅情
 府儒早晚起蒼生
 人亡書泯幾回歲
 境致空留金澤名
 御所ハ谷阿彌陀院の後の切通と出る島と云里俗云く
 龜山帝の行宮の跡なりと
 切通ハ則御泰詣の鎌倉志

此帝勝地佳境へ遊歴のりふあ地とも此地へ御幸のりふ

舊紀に見えずと

魚好法師閑居旧跡 其地今あまへりす

魚好家集 武秀因室造りてのち青住一教のりす

右御の御事跡の多のりふあ地ともあまへりす 魚好

藥王寺 三齋山と号し称名寺の前道より左側よりあまへり古義の

真言宗より龍華寺より属を本寺に胎蔵界の大日如来

あり座像三尺あり當寺より蒲御曹司範頼卿乃

靈牌あり表小大寧寺道悟裏より天文九年庚子六月

十三日と記し由鎌倉志より出るとりて今その牌

藥師堂 本堂の前右の方よりあり廊を造りて本寺藥師佛の像殿に十二神あり

拜せしむるなり其法号を掲ぐ藥師寺と大寧寺と改むるなり

天然寺 法爾山と号し同所藥王寺より九丁ありを隔

て瀨戸街道より野島へ砂道の左側よりあり浄土宗より

座像あり一尺五寸計あり作者あまへり閑山を然譽

禪方和尚と号し永祿二年二月 寺宝より弘法大師及び惠心僧都

等の畫りる佛像四五幅あり

龍華寺 知足山弥勒院と号し天然寺より五六町南の方瀨戸

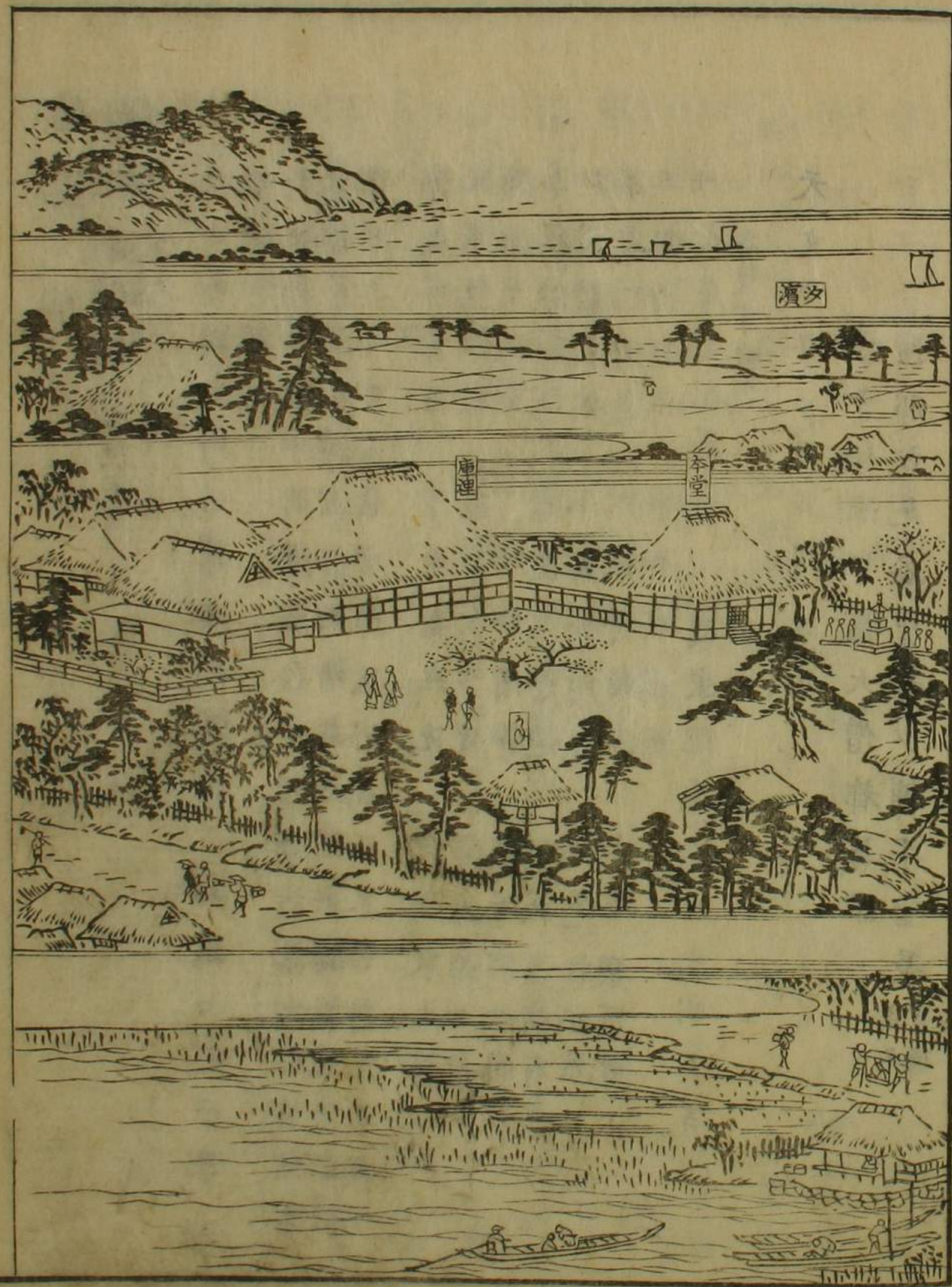
街道洲崎村と町屋村の間道より左側よりあり古義の

真言宗の檀林あり御室仁和寺の末へ

本尊大日如来の座像二尺餘り右より弥勒佛の本像を安

す共より作者を志し左より安置の不動尊より行基大士の

作あり立像 二尺斗 太田道灌入道寄附と云閑山を法印



町屋村
龍華寺



融辨と号
鐘樓 其堂前左の方にあり

大日本國武州六浦庄金澤郷 知足山龍華寺
唱鐘知識文 夫滄海者鱗甲所潛泰岳者翔蹄所集則知智池者
念塵所浴靈鐘者苦類所息然則洪鐘隆鼓焉非但
留老王之望劍兼亦歟 灰河脫三界苦得見菩提

菩薩勝慧者 乃至盡生便 恒作衆生利
而不趣涅槃 一般善及方便 智度等調世間
諸法及諸有 一有頂及惡趣 調伏盡諸有
如蓮體本染 不爲垢所染 諸慾性亦然
不染利群生 大欲得清淨 大安樂富饒
三尊得自在 能作堅固利 大安樂富饒
卅七尊聽陀羅尼 隨求陀羅尼 光明真言

天文十年辛丑五月五日

檀當寺住法印推大僧都善融
檀那古尾谷中務少輔平重長
道傳

寺寶兩界曼荼羅 幅共二唐畫中 八祖畫

像 一幅弘法大師或願行 十三佛補像 一幅中將姫の不動畫像

一幅弘法大師の筆なりと云 祿補の裏書は太田道灌奇進とあり寺僧云く

天正年間 御當家よ於く重修なりと云 鈴一箇弘法大師の持物

五指量愛赤明王像 一箇共運慶の作の二種ありと云 佛の持物

鳳凰頭 箇龍頭 上箇金の箔と貼せり 灌頂の時幡を掛る具あり

當寺ハ治承年間鎌倉右府頼朝公伊豆國三島明神と

金澤瀬戸の地小勸請ありあり 後法味を進むる爲

文覚上人と共に志を合せ文治年間六連の山中に精舎を

創建せし 彌勒菩薩の像と安し 都卒の四十九院に

準擬し四方に六八の僧坊を建淨願寺と号庄園若干

と寄らる 當寺是なり 往古弘法大師獲摩訶般若

覺を並へ粉壁ハ月の光を移せ伽藍ハ博敞あり 丹柱あり

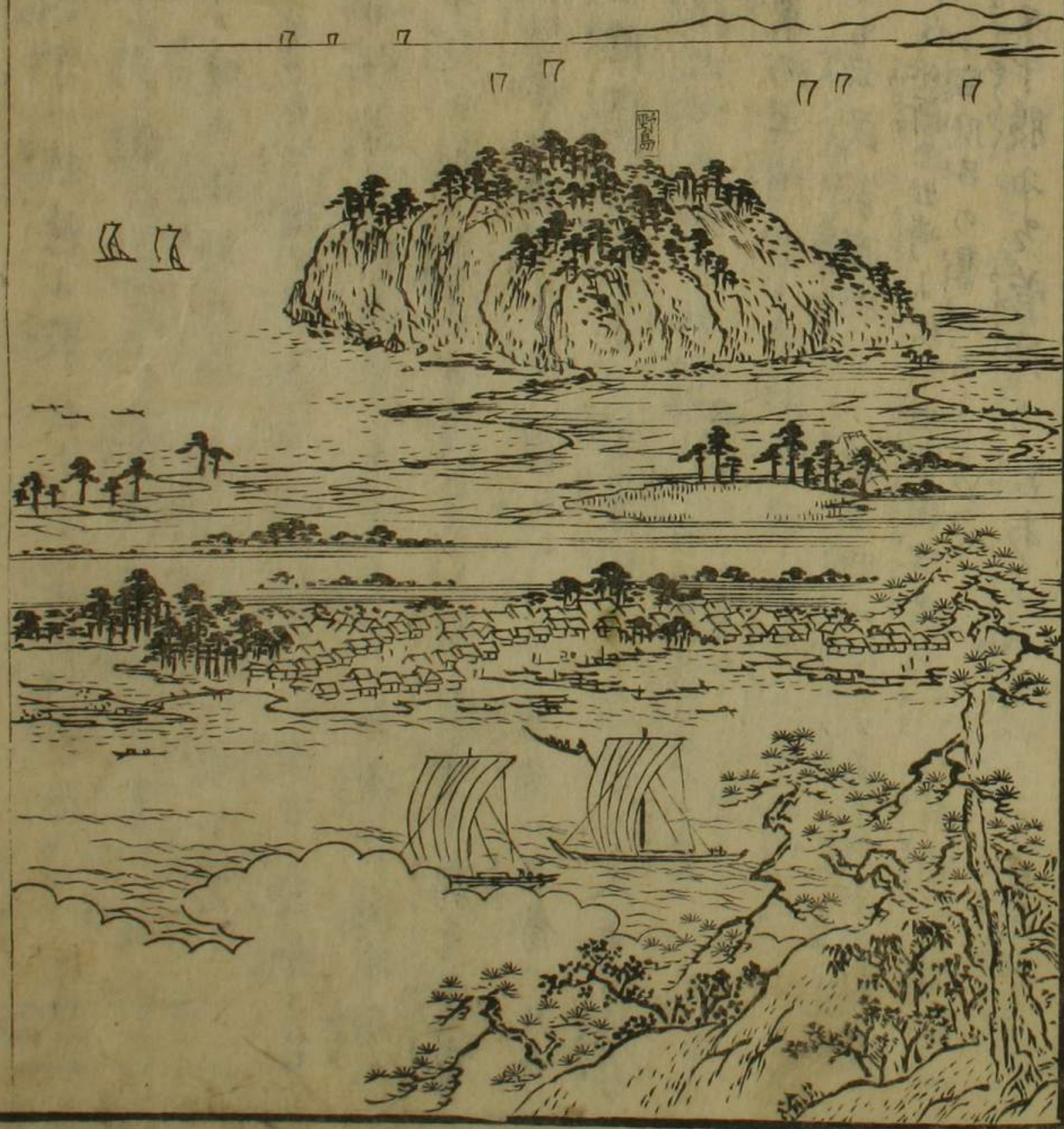
星の林をなせり 其後正嘉年間南都の恩性律師當山小

星の林をなせり 其後正嘉年間南都の恩性律師當山小

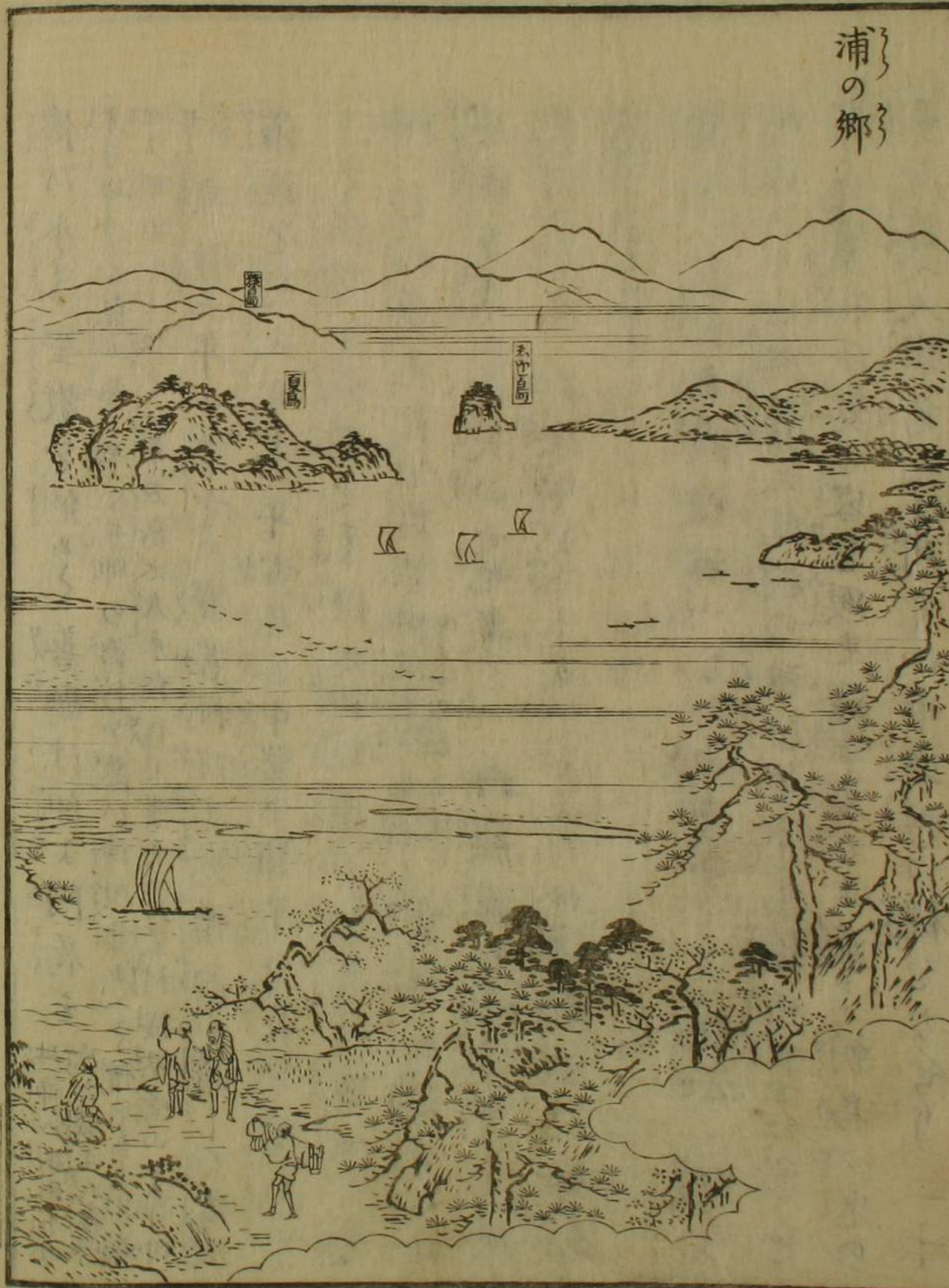
住し戒律を弘め弘長二年中東寺の能禪法印當寺に
於く灌頂を修せしむる印融僧都の附屬に依て光德寺を
兼帶せしむる此寺も頼朝公の建立なり真言の靈樞なり高野山
無量光院印融東遊の初此寺に住親筆の書籍文庫あり
充満然る數度の兵乱より西院の領地も他は奪はれ大に
荒廢せしを明應八年融辨師大永四年甲申八月朔日薨八十二歳深く是を愁へ
本尊の冥助を願はれし菅原朝臣中務丞資方力を合せ
伽藍再興を企むる時本尊彌勒大士夢中辨師に告
めり是より良き當り未世有縁の勝區あり彼所へ移
し三密の法燈を挑へしと夢覺る後其處を窺はると竜
燈の奇瑞あり洲崎村の境なり此堂は教團の竟は辨師
松あり竜燈の松と号今ハ枯り
本尊の靈尔は任せ此地に至る二町四方は結界し兼帶
し其の淨願寺光德寺兩院の僧坊を合せ一寺と爲し
後土御門院の勅を奉り知足山龍華寺と号師資相

傳の本尊聖教を納め善融法印は附屬を此師ハ相州小田
原の城主大森の
末子なり龍王丸と号弁師の徳終を慕ひ淨願寺に入僧とあり其營
世は隠れかり依り北条左京大夫永樂錢七貫文并柴村權現堂山を寄附
享祿五年小東寺の寶菩提院亮惠僧正を請りて傳法
灌頂を受天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越と
し洪鐘を改鑄せし後太田道灌不動尊の靈像を寄
附し武運延長を祈り此不動尊の像ハ
此不動尊の左に安ん靈牌を置來世の
追福を求る天正十九年御開國の後當寺を御修
營りし御朱印を下ししより四海泰平此祈念
意ありしなり
當寺ハ真言古義檀林一宗の本寺なり金澤小甲より
境内に古木聳え覺樹の粧ひを示し緑竹翠の色を
なす實相不變の容を顯し海水左右に湛る朝鳥夕鬼の
影を浮へ人家前後は列り山市漁村の觀をなせり二十

鎌倉記行
 於夕子浜
 鳥帽子島
 沖より
 あき
 風物
 澤菴和尚



浦の郷



有餘の未寺ハ林邑ニ散在シテ年々の法會月々の勅修
 恒例ニ任セテ怠ラズニテ實祚の長久武運の萬歳哉
 祈ミテ暮る曉の振鈴の声ハ無明煩惱の眠を覺シ夕比
 梵鐘の響きテ三途の迷夢を破る實ニ江南の一精舎トモ
 善應寺野島山ト号シ同所ヨリ半道ナリ盛瀆を隔テ南の
 方野島ニ傍テあり真言古義ノ龍華寺ニ屬シ本尊
 不動明王の像ヲ作者トモテ正觀音の本像ハ立像ニ尺半
 ありテ聖徳太子の作ナリ愛深明王ハ座像一尺五寸ナリ
 乃リ弘法大師の作ト云此像の胎中ニ愛深明王の小像
 千體と作テ蓋ラシムルアリ
 野島同所東の出崎中ニ瀨戸橋ハ其間七八町あり土人
 百軒島トモ云民家百軒ヨリ餘ル時ハ必災アル所百軒島ト
 呼ビテ此所の出崎ハ紀州亞相頼宣卿の山の出崎ニ稻荷の
 盛風呂の舊地ありトナリ
 小祠あり又中腹ヲ菅神の宮あり此地の北ニ北を平方ト

いひ町屋村の東を金澤原トシ此地の東北海濱をひ
 鞆の浦と稱セシ

鎌倉記行

岩のありてふもつひと自ラ體をゆ
 汀とつらふ秋の色ハ世多らるれば

乃の秋を多ひあせくありたり地島の多れを秋乃之 澤庵

野島渡一野島ヨリ南の方室木村へ入渡シテ舟路
 一町餘あり江戸ヨリ浦賀への近道ナリ

洲崎野島の西瀨戸橋の東北漁村を云鎌倉志ニ云太平
 記及び鎌倉年中行事等の書ニ洲崎トありテ鎌倉山
 内の西ニある洲崎村のヨリ中ニ此地ありテ見え

瀨戸或ハ迫門
 又作洲崎と引越村との間をのり

四國雜記 瀨戸を海とつらるる猶地のまへを



旅亭
東屋



其二



瀬戸の沖は海ありてくさくさ

あまのたけのたけしう波あつた瀬戸の汐合波はあ人

磯山は磯の磯りはるもあまのたけのたけしう

あまのたけのたけしう波あつた瀬戸の汐合波はあ人

瀬戸橋 同入江に架せ中間に臺を儲け橋杭を用ひし

しと長と二間ありは橋二川を渡ししと

追門の明神とく入海にさし山あり古本馬籠の橋あり橋の下あり

照天姫松 同所北の方西の出崎あり延寶庚申の大風

吹折らるる一株の松の根株のを存せり里彦

云く照天姫姥の爲に燻られしとく姥を焼く松と

りしと

鎌倉大草紙云 應永三十年癸卯春三月常陸國佐人

小栗孫五郎平尚重と云者あり謀反を起し鎌倉

背をたれは源持氏結城の城へ勅座あり同八月

二日あり小栗を攻らる終小栗忍びく三州へ落れ

とある条下は云今度小栗忍びく三州へ落れ其子

小次郎忍びく忍びく關東よりあつたり相州権現堂

と云ふは終に其邊の強盗を集りて宿に宿

かりたれは主の中は此浪人を常州有徳仁の福者の由

聞く定る隨身の寶あり打殺し取らる由

終合を乍去健なる家人ありあせん云一人は

盗賊中を酒を毒を入吞せ殺せし先と同宿の

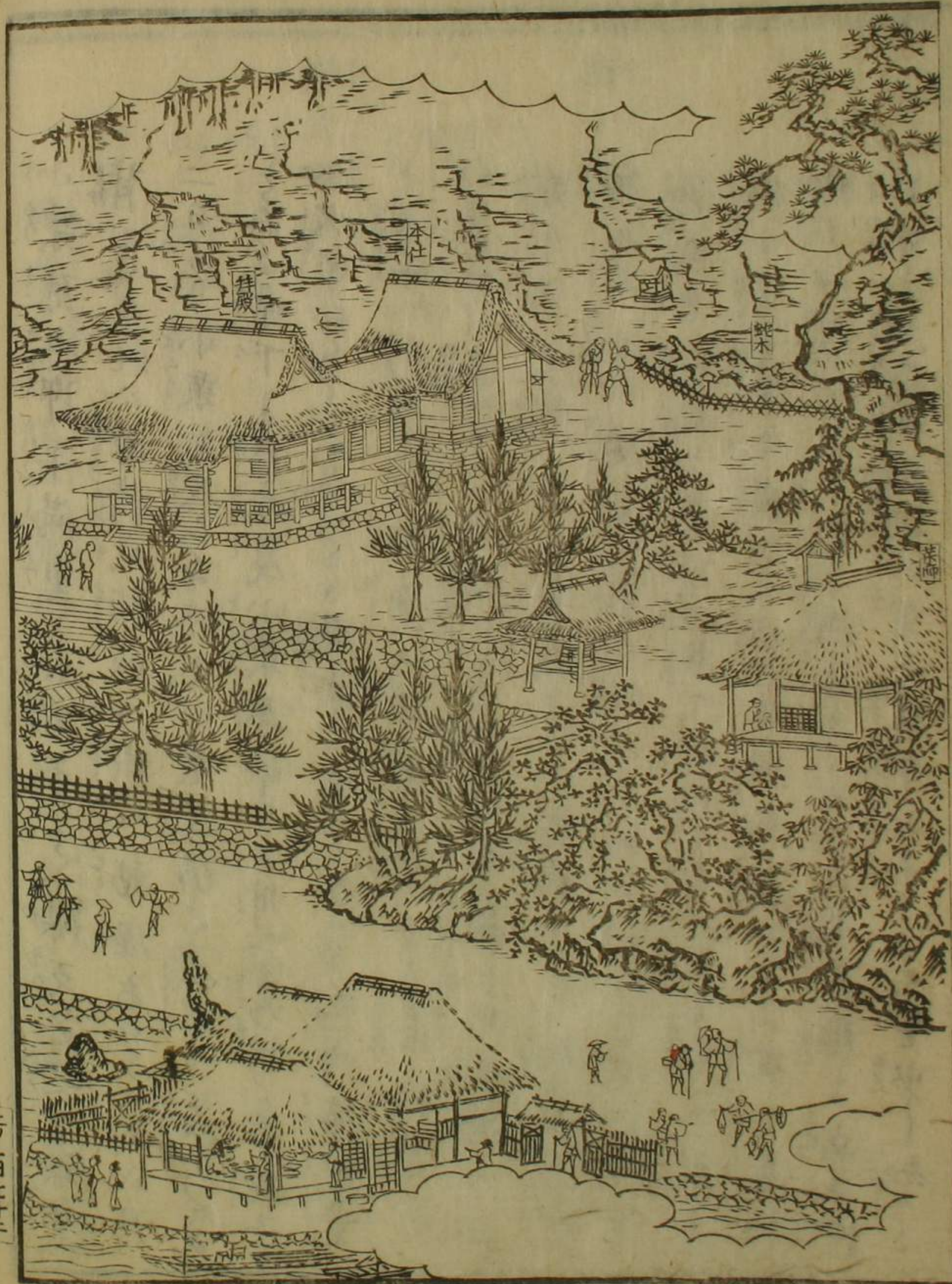
遊女をを集今様を唄ひせ踊舞戯れは彼小栗城

馳走の躰小栗を酒を呑めり夜酔ふ立り

照姫と云遊女此間小栗は逢馴此ありしを以て

瀬戸明神社

法身妙應本無方
三島不阻一封疆
山色涵波頭無跡
朝陽出海是和光
沢庵



あや自ら此酒を呑せしありし小栗とありし酒を更なる呑せし
由と私言々間小栗も呑極ふとてか酒を更なる呑せし
家人を知らず何れも解伏せし小栗ハ夜初め
解めく林の有る間へ出くはれハ林の内小鹿毛かた
馬を繋ぎ置り此馬ハ盗人共海道中へ出大名往
来の馬を盗り来れとも才一のあつ馬あつ人も馬
とも喰踏られハ盗人共不叶し林の内ハ繋置り
小栗是を聞き密に立帰し財宝少く取持て彼馬ハ
乗鞭をもちめ後行り小栗ハ毎双の馬乗めて庁時の
間ハ藤澤の道場へ弛行上人と頼られハ上人あられ
侍衆二人付り三州へ送らる彼毒酒を呑る家人并
遊女少く解伏せし川水へ流し沈め財宝を尋取
小栗を尋れともなる盗人共ハ夜分散る

酔小立る照姫ハ酔し驛小もて解し掛られとも本より
酒を呑りし水ハ流れし川下より上りたどり
る其後永亨の頃小栗三州より来りて彼遊女を
出し種々の宝と与へ盗人共を尋皆誅罰しり後ハ

三州に代り居住せしり

鎌倉大草紙小栗より考ふ照天姫ハ照姫の名を世に
萬代と稱せし同書小次郎とのありて萬代と云ふを
云小栗系譜を考ふ孫五郎平満重子助重とありて
今世は云はれしハ此小栗の附倉の説を備へし

瀬戸明神社瀬戸橋あり一町半西の方道より右側あり
祭神大山祇命一座之神主千葉氏奉祀也社傳し云
當社ハ右大将頼朝公治養四年四月八日豆州三島の御神を
勸請なりしあり鎌倉年中事あり四月八日瀬戸
三島大明神臨時の祭礼とあり或云往古此神此地へ飛

来^き 土人傳へ云今金竜院の庭中飛石と

看^く督^{くわく}長^{ちやう}像^{ざう} 按^あ頼朝卿御倉へ入りし上止りしものあり
此年四月八豆州の配所北條の館は六浦社領久良岐郡
六浦不審伏神主拘とあり六浦社領の分限帳は六浦社領久良岐郡
遊世里人糶師をかししは依る古色とくしあり

額^{がく} 内庫小 **巨一位大** **山精神官** 世尊寺後二位經尹卿筆

同額裏書曰 延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之 沙弥寐尹

鳥居額 瀬戸明神 神道長正二位卜部 季兼卿筆

鐘樓 社前右の方よりあり

瀬戸三島社鐘銘 洪鐘新製寄器海場電村里聽鮮閑静動閣奏敬悲近
輿體黃玄緇素益大禪覺煩惑夢驚生死眠昏曉清響

劫々永傳 應安七年四月十五日奉鑄之

檀那 勸進 聖沙 釋阿 并十方四眾等 大和權守國盛

藥師堂 本社右よりあり土人

按^あ下僧下僧伊香保の湯は浴せし頃相模國の住人乃禪正信俊とて
父左衛門上州伊香保の湯は浴せし頃相模國の住人乃禪正信俊とて
此瀬戸の三島明神の社前より信俊の輩の敵を討むとて下り身を
よけ放^{はな}下僧と号し謠曲ありとて他^たの書にえあり

三本杉 延慶庚申の大風は吹折れし今ハナリ

蛇混拍 本社右の傍にあり延慶八年庚申八月六日の暴風吹倒され
今地工は横りあり其樹長大なり竜蛇の起伏あり

梅 花無盡蔵曰文明竜集丙午十有八年小春二十
有七己亥盤桓瀬戸六浦之濱遺廟之前掛昔時諸

同 瀬戸社 自注云六浦廟前有古拍屈蟠



瀬戸
辨財天

遺廟拍圍六浦橋
歸鴉飛破翠屏面

朗吟繫馬石支腰
刺被風聲黍晚潮

鎌倉記行

迫川の勢
神威

まゝの川を今もひひの川にさしあがり地内

当社境内を千歳のお本雲を流き回岩社頭を流きみ

やまの山の勢ひ実り巨靈神のまを延きり川くあり

此山を遷しえとあやむ社前の老樹浦風小靡さ

打寄る浪を下枝を洗み一根清浄なる時六六根共に

清く我人の頭も神もやとさめやといとさくそ

なる

瀬戸 同社前道と隔て南の入海へ築出く

小島にあや昔頼朝卿の御臺所平の政子御前江州

竹生島の御神を勧清せしれらるとあり

島の中混拍を枯く



金龍院
飛石

奇形甚なり 同橋の下に福石と唱ふものあり 金澤四石と稱す此石の

前より福の跡とあると云信ふ

鎌倉記行 社のあり島とつとむる舟を舟と云ふ

波風 舟のあり島とつとむる舟を舟と云ふ

圓通寺 日輪山と號も同所二町半許西の方道より右より

あま昔法相宗中より南都法隆寺に属す今八天台宗に

改ましく江戸の東叡山に属せり本寺を元三大師と安置す

岡山ハ法慧法印と号久世大和彦源廣之寺領と附

東照大権現宮 山の上の鎮座なり郡官

昇天山金龍院 同所西南の方四町餘を隔て同一道の左

側の海岸にあり世俗飛石山とも呼ぶを禪宗に

鎌倉の建長寺に属せり本寺正觀音座像二尺三寸行基

大士の作なり 鎌倉志に虚空藏菩薩と 方崖元圭和尚を以て

飛石 當寺後園の山の麓にあり高さ一丈あり廣さ九尺をもち此石

飛石 當寺後園の山の麓にあり高さ一丈あり廣さ九尺をもち此石

九覽亭跡 同所の山の上あり曲折して登るのつとある人の備へり亭の

八景に能見堂を加へて見るとる名づけたりとあり

泥牛庵 金龍院の前路を隔て向側にあま禪宗あり

鎌倉圓覺寺に属す本寺ハ七寸計の唐佛の土面觀音の

像を安置す此庵の開祖ハ圓覺寺の傳宗庵南山和尚 諱ハ

聖一國師の嗣法なり建武三年 中興ハ習甫玄道座原と号す

十月七日寂崇壽寺の開山あり 中興ハ習甫玄道座原と号す

當庵の南一町半山の上古墳二基あり其一ハ海老名

長門守とつとむる人の墓あり此人泥牛庵あり自害し

終まりと云いふの時とき世よ事こと實まこととも小こ精せい一いつかかす

猶なほ考こうへい 按およよ海うみ老らう名な源げん三さん季き貞しん

荒井あらい妙法みょうぽう日荷にっか上人じょうじん加持かぢ水みづ 同所どうじょ農家のうけ金子かねこ氏うぢの地ちは存ぞん在ざい

井いと云いふの味あじ甘あま美みゆゆ 尤なほ靈れい泉せんとり此この所ところの小地せうち名なを

荒井あらいと稱なづせらるる 往むか古こ日にっ荷か上じやう人じん荒井あらい平次郎へいじちやう光吉みつきちと号ごう

一いつくく此地このちは居住きよぢゆうせらるる かかく呼よままるるとなり 事こと跡あとハ

能のう仁にん寺じ舊きゆう跡せき 今いまの米こめ倉くら候こうの陣ぢん屋やの地ちありとも此この寺じハ昔むかし

鎌倉かまがら志し古こ記き曰い 上じやう杉さし房ぼう州しゆう太た守しゆう築ちゆう武ぶ州しゆう金かね澤ざい能のう仁にん寺じ

創すゑ七しち字じ伽藍がらん請しん方ぽう崖げん和わ尚じやう為ゐ開かい山さん第だい一いつ世せい瑞ずい山さん曰い福ふく

壽じゆう躰たい寺じ日にっ能のう仁にん太た守しゆう有ゆう旨し隆りゆう能のう仁にん寺じ位ゐ列りやく諸しよ山さん者しや也や

永えい德とく三さん年ねん小せう春しゆん日にっ東とう暉けい曇とん晰しやく謹きん記き又また本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇とん年ねん三さん月げつ七しち日にっ始し之し同どう暉けい曇とん晰しやく謹きん記き又また本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

之し曇とん年ねん三さん月げつ七しち日にっ始し之し同どう暉けい曇とん晰しやく謹きん記き又また本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

大だい檀だん那な房ぼう州しゆう道だう合ごう德とく珠しゆ書しよ之し 喜き上じやう總そう州しゆう法ぽう眼がん朝ちやう榮えい作さく

能のう仁にん寺じ佛ぶつ殿でん梁りやう牌はい銘めい 鎌倉かまがら建けん長ちやう寺じの龍りゆう峯ほう庵あん

恭こう願げん皇かう圖と鞏こう固こ而に四し海かい昇しやう平へい黎れい庶しよ安あん寧ねい而に五ご穀こく豐ひやう稔ぜん

檀だん那な前ぜん房ぼう州しゆう太た守しゆう菩ぼ薩さつ戒かい第だい子し道だう合ごう敬けい白はく在ざい伏ふく冀けい佛ぶつ

永えい德とく二に年ねん壬にん戌しゆ四し月げつ日にっ開かい山さん方ぽう崖げん元げん圭けい謹きん題だい右みぎ

六浦ろくほ山さん上じやう行かう寺じ 泥牛でいごう庵あんより六七町西南の方道より右側に

ありありあ當たう寺じ往むか古こハ真言しんごんの古刹こせつゆゆ六浦山ろくほさん金全きんぜん寺じと号ごう

然しかるる 不ふ應えい安あん年ねん中ちゆう比ひ住持ぢゆうぢ某あ日にっ蓮れんの法ぽうをを日蓮宗にっれんしゆうとあり

北德きたとく中山ちゆうしやんの日にっ祐ゆう上人じやうじん閑祖かんそとと自みづから妙法みょうぽう日荷にっか上人じやうじんと号ごう

祖そ師し堂だう 宗祖しゆうそ日蓮にっれん大士だいしの像ざうを安あん坐ざ 法華經ぽうわきやう讀よ誦じゆののとあり

祖そ師し木像ぼざう胎中たいちゆう收藏しゆうざう法華經ぽうわきやう書寫しゆゐ人名簿にんめいぼ 紙しハ為用ゐようののゆゑ

三寸三分さんすんさんぶんの徑筒かうじゆう入いり 胎中たいちゆうに収いむむ徑筒かうじゆうハ味あじ和わ轉てん向かうの製せいののあり 法華經ぽうわきやう



六浦
上行寺



八卷小書写の人名簿一卷共九卷あり其文云く

御身の御經奉書寫之人

安立坊の關山

一	卷	圓融律師	日源
二	卷	良範坊	日秀
三	卷	正圓坊	日正
四	卷	祐奠坊	日傳
五	卷	良寧阿	日秀
六	卷	衆寧阿	日秀
七	卷	衆賢阿	日秀
八	卷	理賢坊	日理

奉 右願主 卿公沙門 妙光慈父母

奉 讀誦妙法蓮華經五部

奉 方便品 壽量品 陀羅尼品 各十遍宛讀誦之

奉 讀誦 十如是 自我謁 題目百廿反

奉 唱題目一萬反 日源敬白

應 永十三年丙戌十月十三日 御身ノ形相中老日法上人御作也

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益者尔住迹用本
名四字初隨有喜形相身任御附屬妙法之要五字弘一
天四海秘法良藥施所嚴迷者也廣爰流布因探純就信
心大施主等之成就

釋迦堂 本尊釋迦多寶四菩薩 真言宗

六浦妙法日荷上人石塔 祖師堂之釋迦堂との間櫃の本にあり

上下との後人造り添はるるものとおぼしめし
十三日と彫付あり妙法當寺の大檀那
妙法俗稱を荒井平次郎光吉と号建長六年甲寅日蓮大士北總中山の
相州法隆寺へ歸らんといふの日富本常忍と同敷
此妙法上人未荒井平次郎光吉と号建長六年甲寅日蓮大士の化道
上人の隨從し此家傳度の法妙法と号建長二年癸巳六月十三日示寂を依日荷上人と

蓋も肖像ハ中山法華寺あり又妙法の住持一曰臨々今の金竜院と米倉家陣屋の
間ハ妙法律師日荷上人の持水の条下ハ詳あり又云江ノ谷中延壽寺の
記ハ妙法律師日荷上人ハ六浦荒井の城主掃磨守と号するとあれども城主と
す或ハ此妙法ハ杉田如法と号す北条時頼の臣ありと云あるれども時頼逝る年歴を
以て考ふるとその時代ハあひひと

寶篋印塔 祖師堂の前左の方の山の裾ハありと高さ一丈二尺ありりりり
塔の正面ハ梵字を刻し横面中を文治元年の年号を刻せり

當寺 往古真言宗なり證
按米倉家陣屋の上あり上行寺の後山續ハ知足山龍華寺の旧地あり
と云今ハ上杉寺の後の山此上畑道の号ハ花藏院橋と号するものありハ昔龍華寺
支院花藏院の門前ハあり橋あり

鎌倉志ハ當寺什宝ニ位牌一枚あり日祐上人の筆の曼陀羅を
彫其下に日祐上人一世の間引導せし人の法号俗名成
奉應安三年と記せり又日祐上人の大曼陀羅及日蓮
大士の消息等と存する由記され

今當寺ハ傳へ
すと云

金剛山嶺松寺 同所三丁斗を隔て西南の方道より右側ハ
あり禪宗の建長寺龍峯庵ハ属を本寺ハ釋迦如来の

本像と安置せり 関山ハ月窓和尚と号ハ
二日 儉約翁の法副なり傳へ云當寺ハ千葉介胤義の建立と
鎌倉志ハ瀬戸明神の鐘の銘ハ神主平胤義とあり神主ハ
平姓千葉氏なり此人の建立欽千葉系圖ハ胤義と云
有リ寺建立のりハ詳なりと云
因ハ云ハ千葉家累代の
空域ハ本堂の後園百歩

六浦 東鑑ハ將軍家此地ハ遊覧のり往くハ
又同書ハ建久三年壬子二月廿四日丁卯武藏國六浦海辺ハ

召捕鎌倉へ進上しと実檢の後六浦の海ハ沈らる
とあり
北条九代記ハ田村庄司則義ハ小山善犬丸ハ與ハ菅領氏満ハ
其子五歳と七歳



侍
光傳
寺
川



なりしと生捕く六面の沖は沈みそくけらしとありて興あり
永祿の頃ハ小田原北条此地を領し六浦本曾分の地ハ
武田家へ付し同所大道分の地を龍源軒といふ付し
たゞ由分限帳よるんこと

澤庵和尚鎌倉記行

あられハ三河澤庵へ移る一塚をこけハ
野ありてあむむはの海とこハま
こハ海土の子も此ありをん

河津の海人のま乃控ハ海のま干溜り於 澤庵

海士のまより此ありをん

海あれむつゝの海の海士のまをせもはそり 全

六浦川 此地の道を横きりて流る小溝を云又此溝は架す

小橋と六浦橋と号くといふ

日光寺の辺あり光傳寺の辺連の地の字を川村と称し按る昔の水流の
田代なる所ハかくをいふなりん

日光山専光寺 嶺松寺より二町計を隔て南の方道とあり

右側はあり浄土宗とあり同所天然寺は属を本尊十一

面観音ハ立像一尺計あり佛工春日の作なりと云相傳ハ

照天姫の念持佛中へ姫松葉ゆき燻らむし一時身代

立立とありと云傳へり寺の後の方は日光権現の宮あり

故小山号とあり

油堤 同寺の後の田圃を隔て津町とあり西の方小續き

とあり山を油堤と云由土人云る 鎌倉志を傳光寺の里諺に

照天姫の乳母侍後とありその姫の粧具を携へ此所連

尋來りしとあり姫の行方あるを歎き悲しむ彼粧

具を捨て終る此所の川へ身を沈めしとあり故に号とあり

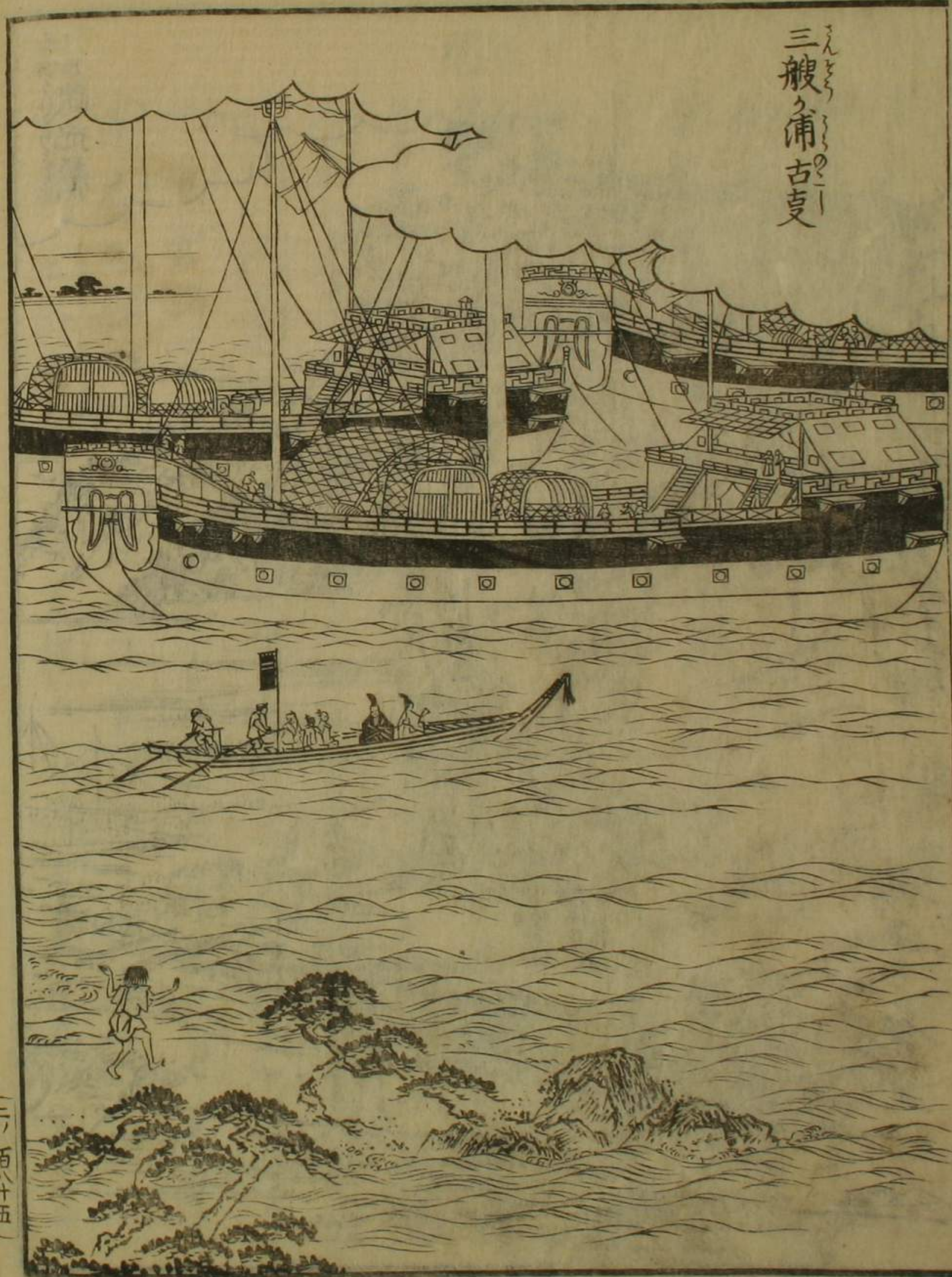
侍後川 川村と大間村との中間光傳寺の前を流る川の

鼻缺地藏



下流を以て水源を鎌倉より發し、未だ三艘村より盛濱へ
 如く海灣を會し、瀬戸街道へ横らるる架を橋を侍從
 橋と号名義ハ油堤の条下よ云りぬ。此橋を渡りて右の
 道ハ武藏相模の國境地蔵の辻へ如く鎌倉へ往還の道
 なる南仍の道ハ三浦三崎への通路なる左の川傍の道ハ
 三艘浦又相州境浦郷等への道なり。

常見山光傳寺 同所北の端道より右側侍從川に傍る
 あを浄土宗の如く鎌倉光明寺に屬す。阿彌陀
 如来の本像を立像中より四尺許あり、作者あり。凡
 岡山ハ得蓮社忍譽靈傳上人と号門の内右の方より
 地藏堂あり。本多地藏菩薩ハ立像六尺許あり。之
 運慶の作ありと云。地福山蔵光寺と号。凡
 界地藏 土俗鼻缺地藏と稱し、光傳寺より九丁あり。



三艘之浦古吏

西の方鎌倉道の傍にあり巨巖の壁立しつる所は
此の像を鑄せしむる像の鼻缺損也此所ハ武蔵相摸の
國界や嶮村と号す

三艘浦 六浦の南向三艘村にあり永祿九年の春唐船

三艘此浦に着岸せし故に名付くとして鎌倉志云其時
舟に載来り一切経及び青磁の香爐花瓶等を皆

称名寺に傳へありと云

海蔵山太寧寺 三艘浦の東瀬崎村にあり 界地藏あり 往古ハ

布金の道場や薬師寺と号し真言宗なり

御曹司源範頼公生害あり後其法号を採り太寧寺

と号し千光國師閑山とあり 禪林に轉し鎌倉建長

寺の属寺とす 薬師寺の号の廢せんを歎き頃寺前村の地へ
本寺薬師如来立像丈五尺あり十二神將の像ハ三尺あり

あり共運慶の作し鎌倉志に當寺勸進帳を引く

云往古 伏見帝永仁年間此村に貧女あり父母の忌

日に當りし佛に供養しき便なり絲を繰

卷子とて賣り佛餉に備へんとす然れども

容易に買人なし或時童子一人来り是を買ふに價を

以り父母の忌日此供養の料に充てし佛前不至る小

件の多きを依り知ぬ如来貧女に純孝の志を

感し自介以来へ薬師と云とあり 佛へ肩頭をのりあり

時其祈願成就し報賽とす 定門神位裏に範頼公建久四癸丑年八月と

蒲冠者範頼靈牌 堂神位裏に其御面大寧寺殿道悟大禪

範頼墓 本堂の後の山麓にあり高さ二尺六七寸あり

按ふ異本源平盛衰記に範頼伊豆の修善寺に伊豆の景時
又頼朝子申して伊豆小越景時父子三百餘騎を修善寺に押寄せ

範頼ハ或坊よ小袖ハ大口計ハ少ク其ノ差詰ヲ散ク小射ハハ
其ノ後景時煙ヲ静メ範頼ノ焼首取ルニ場子火トシケ自害シテ夫レハ
とあり鎌倉志云ク級を此地小華一を村詳トあり

題

太寧寺六首

絶海

寺樓一抹晚江煙
老矣身心機事外

朝送鐘聲落釣船
間鷗容我社中眠

殘曉香消柏子煙
聞君去借江村宿

老來無夢趁漁船
一夜鷗邊看月眠

六浦遙連三浦煙
興來撐棹竊佳處

越風隨岸幾移船
月落前灣猶未眠

山街夕日水籠煙
盖世功名身外事

雪後蘆花月滿船
幾人能得一菴眠

衲衣懶惹御爐煙
晚興遲留江上寺

還愛華亭載月船
三山翠映白頭眠

功名盖世畫交煙
一錫歸來楓外寺

失墜危於灑灑船
白沙翠竹閉門眠

當寺書院ハ北向小瀬戸の入海を眼下に臨み風光殊小

勝れし寺寶は範頼自筆は古奇の懸幅及び陣中用

らせしと云長刀一振あり

宮根権現社瀬崎の東室本村あり又民家の間は犬樟の

老樹あり

雀浦同所の南に出崎を以菅神の小祠あり故に主人ハ

天神崎とも稱を此地の海灣と浦の江と云

中着巖同所絶壁の下あり大ニ二間四方に石盤あり潮尽

根附巖同所百歩を隔て西南の於此崖下ありと云

前の中着岩あり

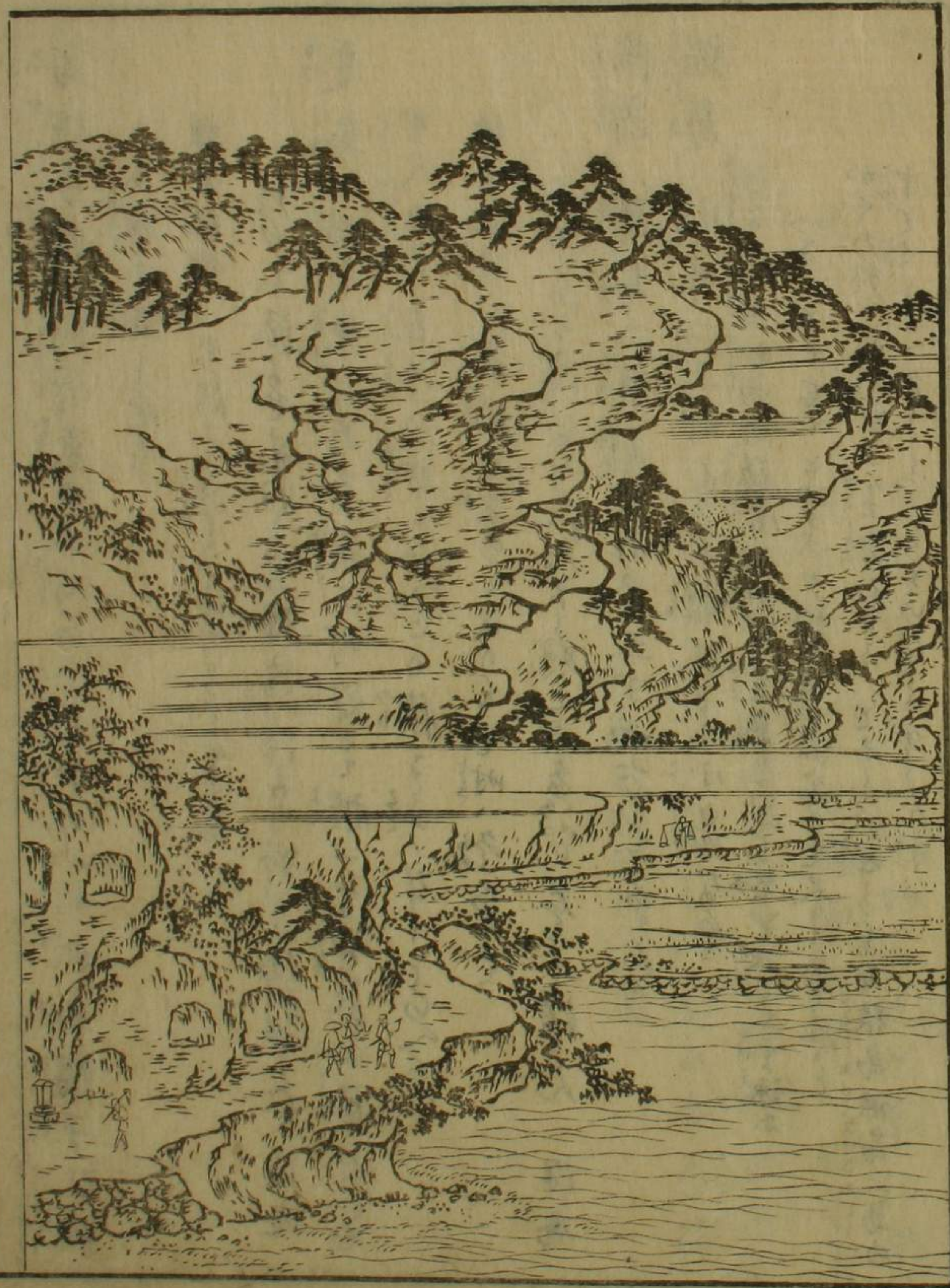
榎戸湊刀切村の南の入海と云

田國雜記

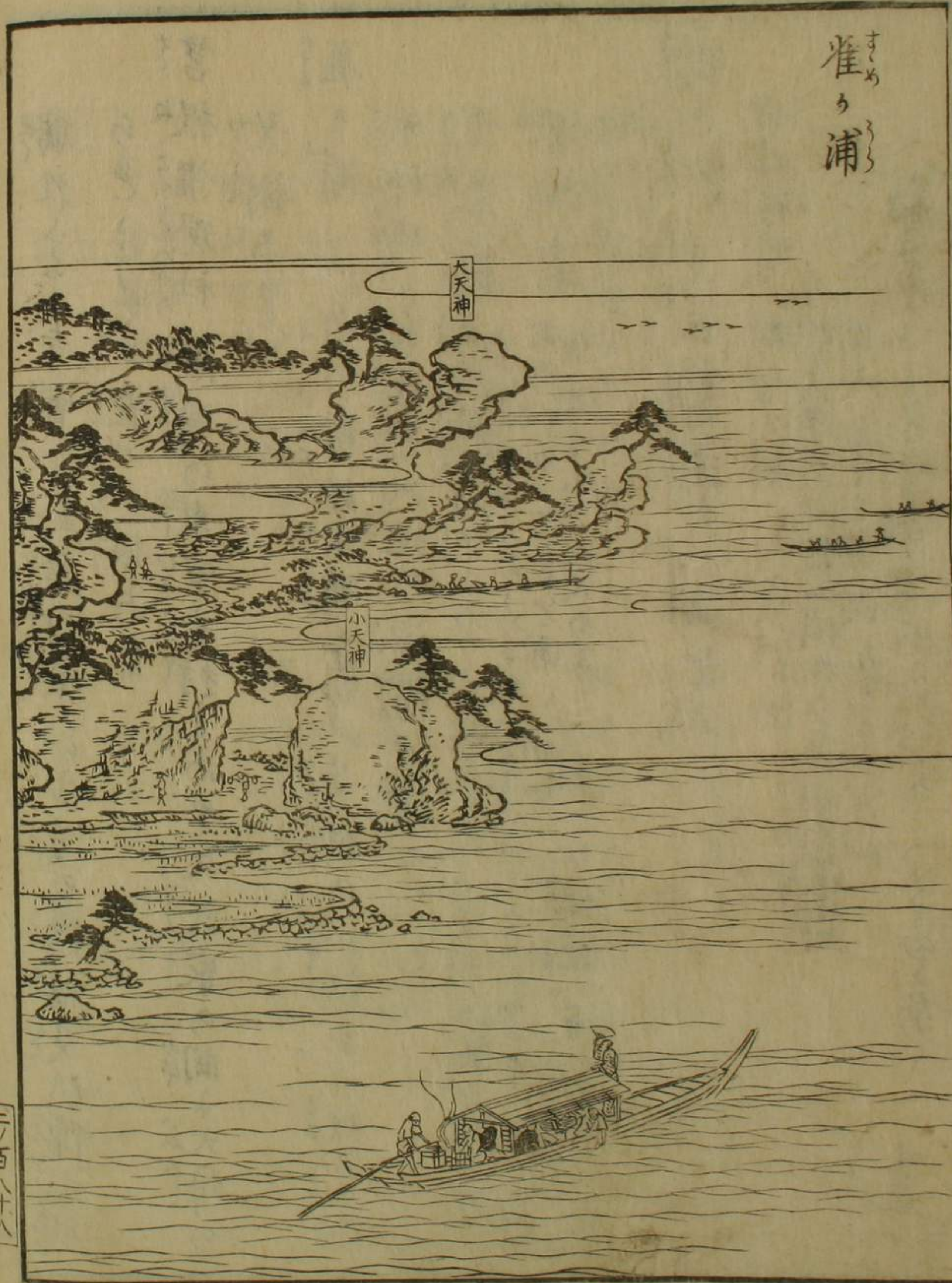
浦川の湊と云ふ所あり此の浦は極大なり
舟の出入り多し其の浦は極大なり

榎戸をさす浦は小川を以てさす

道真
准后



すめ
雀
浦



鳥帽子島 同所東の出崎の小島との形状鳥帽子に似

たる故小名とせり

鎌倉記行 多保一海とのゆかりとてしる

終夕小浪を巻ぬる鳥帽子の沖よりゆき風折やれ 浮庵

夏島 同東にあり長三町餘を横一丁計の小島なり

里人云く玄冬の雪とてとも積るゆゑなりとて

鎌倉記行 夏島を名のとなりたり是時ハ

之冬ふも降白雪たぬとて夏島の名ハ消人 浮庵

猿島 夏島の東南にあり五丁四方をとりあり

裸島 同所二三町をとり離れる小島なり

按深庵和尚の法念記に猿島とて名を挙げて詠ふ

かささぎや暮るとの夕時ぬるぬる人ありやと

かくわれともはたはまをあらむとてあはれ

甲香 此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲

香ハ螺貝の様なる小くく口の程に細長ゆとて出

貝の蓋なり武蔵國金澤と云浦にあり一と所の者ハ

るかきうとてまうしはるをいひとて野槌に今金澤

あき尋まはむといひまははぬとも云とて

此の書は... 國會... 天賦... 世之及前國會天賦之類... 國會... 天賦... 世之及前國會天賦之類...

